

埋蔵文化財調査報告書 39

西志賀遺跡（第2次）

松ヶ洞 14号墳

桜台高校遺跡（第3次）

春日野町遺跡（第3次）

2001

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書 39

西志賀遺跡（第2次）
松ヶ洞 14号墳
桜台高校遺跡（第3次）
春日野町遺跡（第3次）

2001

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成11～12年度に名古屋市教育局が実施した埋蔵文化財の調査のうち、個人住宅の建設に伴って実施した4件（4遺跡）の報告書である。
- 2 収録したのは、西志賀遺跡（第2次）、松ヶ洞14号墳、桜台高校遺跡（第3次）、春日野町遺跡（第3次）の発掘調査報告である。
- 3 各調査に関する事項は、調査毎の例言に記した。
- 4 本書では、海拔高はT.P.（東京湾の平均海面）を、方位は国上座標第Ⅶ系による座標北を示した。なお、名古屋港基準海面（N.P.）は、T.P. + 1.4119mである。
- 5 調査記録・出土遺物は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 6 各調査および本書の作成は、見晴台考古資料館学芸員が担当した。調査および執筆担当者は、各編の例言に記した。本書の編集は、伊藤正人が担当した。



掲載遺跡の位置

も く じ

西志賀遺跡 (第2次)	1
I はじめに	3
1. 位置と環境	3
2. 遺跡の概要	4
II 調査の経過	4
1. 調査の経緯	4
2. 日誌抄	4
III 調査の内容	6
1. 遺構と遺物	6
IV 自然科学的分析	15
1. 貝層ブロックサンプリングの結果	15
2. 動物骨・人骨について	17
V おわりに	18

桜台高校遺跡 (第3次)	31
一、遺跡の概要	33
二、第3次調査の概要	33
1 調査日誌抄	33
2 第3次調査地点と調査経過	35
三、遺構と遺物	37
1 溝	37
2 上坑	38
3 ビット	39
まとめ	40

松ヶ洞 14号墳	19
I はじめに	21
1. 位置と環境	21
2. 古墳群の概要	21
3. 過去の調査	22
II 調査の経過	22
1. 調査の経緯	22
2. 日誌抄	23
III 調査の内容	23
1. 墳丘	23
2. 上体部	26
3. 外部施設	26
4. 墳丘構築前	28
5. 遺物	28
IV おわりに	30

春日野町遺跡 (第3次)	43
I 遺跡の概要	45
II 調査の経過	46
III 土層と遺構	47
IV 貝層ブロック・サンプリングの結果	52
1. はじめに	52
2. 水洗選別の結果	52
3. おわりに	52
V 遺物	53
VI まとめ	58

西志賀遺跡 (第2次)



例 言

1. 本編は、西志賀遺跡第2次発掘調査の報告である。
2. 調査地点は名古屋市西区貝田町1-34-1である。
3. 調査は個人住宅の建設工事に伴うもので約30㎡を対象とした。
4. 調査期間は、平成12年2月28日～3月3日まで行なった。
5. 調査は名古屋市教育委員会が実施し、調査に関する調整事務は、文化財保護室学芸員小島一夫が担当した。発掘調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員水野裕之・服部哲也が担当した。
6. 掘土工事は(有)角田造園に請負契約、基準点・水準点測量業務は松岡測量設計(株)に委託契約して実施した。
7. 資料整理・報告書の作成作業参加者。
小浦美生、植田望子、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木住子、山本雅代
8. 本編の執筆は本文を服部が、貝層ブロックサンプリングの結果については植田望子が、また人骨および獣骨・魚骨については新美倫子氏(名古屋大学博物館)に玉稿をいただいた。

目 次

I	はじめに	3
	1. 位置と環境	3
	2. 遺跡の概要	4
II	調査の経過	4
	1. 調査の経緯	4
	2. 日誌抄	4
III	調査の内容	6
	1. 遺構と遺物	6
IV	自然科学的分析	15
	1. 貝層ブロックサンプリングの結果	15
	2. 動物骨・人骨について	17
V	おわりに	18



第1図 弥生時代の主な遺跡

I はじめに

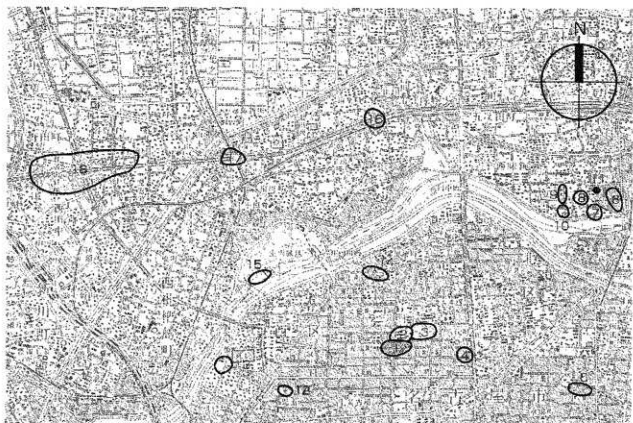
1. 位置と環境

西志賀遺跡は、北区西志賀町と西区貝田町にまたがって広がる。北・西区は名古屋市内で最も北に位置する区であるが、住宅地、商業地としての土地利用が多い。遺跡地までは名古屋駅から北東約3.5km、地下鉄黒川駅からは北西約1kmに位置する。

地形的には名古屋台地北側の、庄内川・矢田川が形成する沖積地のうち、標高3～4mの微高地に立地する。ただし、早くから宅地化が進んだ地域であり、現在の住宅街からは旧地形をうかがうことはできない。

当遺跡から弥生時代前期を含む遺跡を概観すれば、庄内川を扶んだ北約3kmに月繩手遺跡、北西約5kmに朝口遺跡、北東約6kmに松河戸遺跡の低地部の遺跡が、また南東約2kmに片山神社遺跡、南約8kmに高蔵遺跡の台地部の遺跡が知られている。ちょうど、これらの遺跡の中間にあたることから、どの遺跡ともその関連が注目されよう（第1図）。

なお、当遺跡に隣接しては、北に平手町遺跡、北東には志賀公園遺跡がある。どちらも弥生から中世にいたる複合遺跡と推定されている。



- | | | | |
|----------|----------|-----------|----------|
| 1 西志賀遺跡 | 6 松橋寺遺跡 | 11 白山蔵古墳 | 16 月繩手遺跡 |
| 2 平手町遺跡 | 7 富家の原遺跡 | 12 池玉町遺跡 | 17 貫生町遺跡 |
| 3 志賀公園遺跡 | 8 味沢C遺跡 | 13 福崎町遺跡 | 18 朝日遺跡 |
| 4 熊持社遺跡 | 9 味沢B遺跡 | 14 橋本遺跡 | |
| 5 若原遺跡 | 10 天沼遺跡 | 15 中小田井遺跡 | |

第2図 位置と周辺の遺跡（国土地理院 1:50000）

2. 遺跡の概要

西志賀遺跡は、昭和のはじめ頃の小栗鉄次郎氏・吉田富夫氏の調査以後、多くの研究者の注目されるところとなる。特に、遠賀川式土器の出土する前期弥生文化の東端としての評価が高く、戦後は、東京大学・名古屋大学・明治大学等による学術調査も行われた。その層位学・型式学両面からの成果は、以後の弥生土器編年の指標となり、現在でも、西志賀式（前期後半）・貝田町式（中期中葉）という標識名として生きている。市内で最も有名な遺跡のひとつと言える。

ただし、これらの調査は、ごく狭い貝塚地点に集中しての調査であったため、遺跡の内容については長らく不明のままであった。そんな中、平成7年（1995年）に市教育委員会の行った緊急調査では、集落をめぐる環濠の一部が発見され、「環濠集落西志賀遺跡」がようやく確認された。その後、となりの平手町遺跡、志賀公園遺跡では大規模な発掘調査も実施され、周辺を含めた遺跡像が次第に明らかになっていく（うち、平手町遺跡からは、1995年に検出した環濠の延長部分と推定される溝も出土している）。

II 調査の経過

1. 調査の経緯

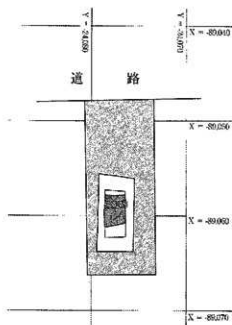
今回の調査地点は推定遺跡範囲のやや西よりにあたり、各大学の調査した貝塚地点からは南へ約50mの位置にあたる。

平成11年2月、市教育委員会文化財保護室に当該地での住宅の建設工事予定と、その際の埋蔵文化財の取扱についての照会があった。文化財保護室では早急に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の遺存を確認した上で発掘調査の必要を事業者に伝えた。その後、事業者との協議調整の結果、平成12年2月末日より約30mを対象に発掘調査を実施することとなった。

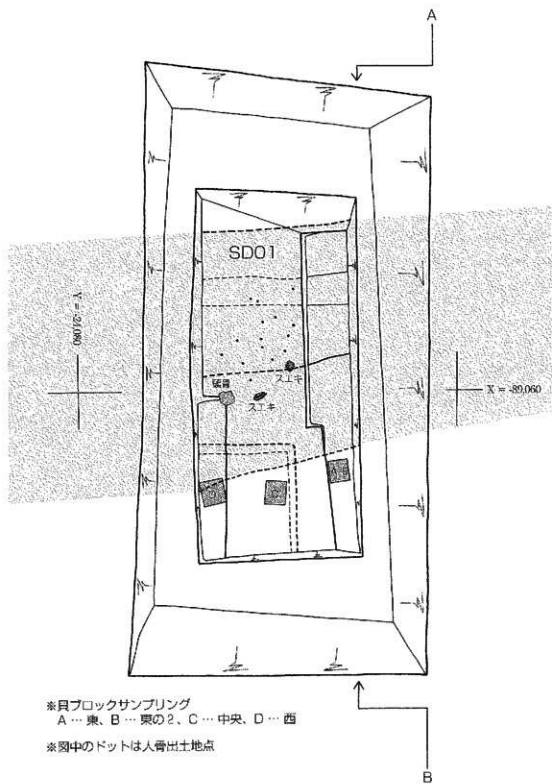
なお、試掘調査の結果、弥生時代の検出面までは約1.6mと深いことが明らかとなったため、安全面を考慮して2段に掘り下げることにした。さらに、排上置き場を敷地内で確保する必要から、一部を先行して埋め戻しまで行う必要があった。

2. 日誌抄

- 2月28日（月） 調査区設定。表土除去開始。貝層をバックする暗灰褐色シルト層（6層）検出。人骨・須恵器出土。基準点測量。
- 2月29日（火） 6層出土人骨・須恵器の写真撮影、実測。6層下にてSD01検出。
- 3月1日（水） SD01完掘後、写真撮影、測量。一部埋め戻し。名古屋大学新美先生来跡。
- 3月2日（木） 黒色貝層掘削。写真撮影、測量。貝層下の青灰色シルト層掘削。完掘写真、測量。
- 3月3日（金） 埋め戻し



第3図 座標軸図 (1:400)



第4図 基本平面図 (1:50)

Ⅲ 調査の内容

1. 遺構と遺物

小規模な面積の調査であったにもかかわらず、中世の包含層、古墳時代の包含層、弥生時代の溝・貝層が良好に遺存し、密度の濃い調査となった。

中世から現代

地表から1.6m下までは、1層=整地土、2層=攪乱土、3層=近～現代の耕作土、4層=沈鉄を多量に含む灰色シルト層、5層=砂層が堆積し、6層=古墳時代の包含層にいたる。

4層は60～70cmと厚く堆積したが、出土土器は中世の陶磁器片・弥生土器片が僅かである。沈鉄が集中していることから、植物の生い茂った湿地状の地形が長らく続いたと推定できよう。

5層は川砂が簞状に堆積したもので、15～40cmの厚さがある。庄内川の氾濫によると考えられ、中世の陶器片が僅かに出土したことから、その堆積時期は古代から中世と推定する。

古墳時代

6層は、シルト質の暗灰褐色土で、10cmから15cmに薄く堆積する。自然木・植物遺体・炭化物を多量に含み、弥生土器片・須恵器・人骨が出土した。土の質と植物遺体を多く含むことから、水の淀んだ状況を推定できるが、浅い溝（流路）の可能性も残る。

注目されるのは、人骨がばらばらの状態で見つかったことと、その近くには完形の須恵器坏身2点が出土したことで、近くに埋葬された人（子供・成人）と副葬品の関係が想定される。ただし、人骨・須恵器ともに二次的に動いていることも確実であり、両者がまったく違う時期の可能性もある。

いずれにしても、須恵器の年代観（東山11号窯期）の5世紀末頃の当地点は、弥生時代の貝層と溝は完全にバックされ、湿地状を呈していたと推定できよう。



写真1 6層検出状況



写真2 6層出土須恵器・人骨（南東より）

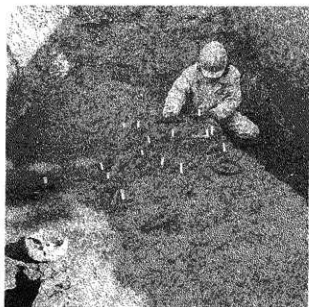


写真3 6層出土須恵器・人骨 (南西より)



写真4 6層出土須恵器・人骨 (西より)

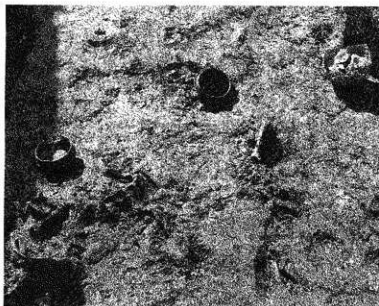


写真5 6層出土須恵器・人骨 (北より)



写真6 6層出土人骨 (部分)

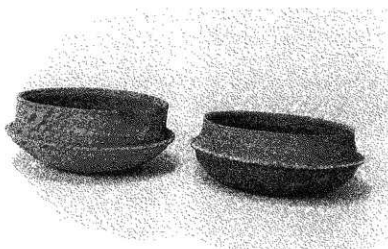
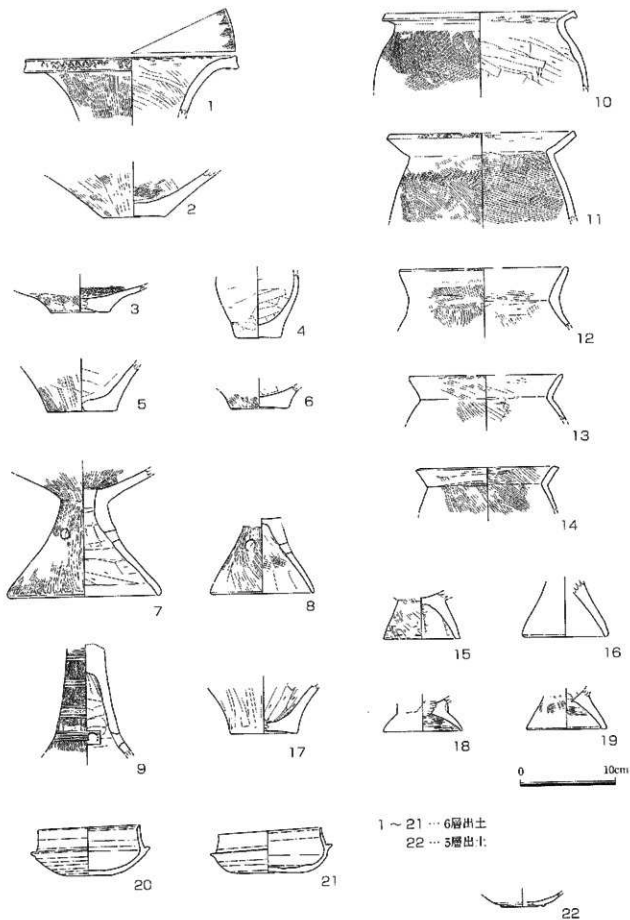


写真7 6層出土須恵器



第5圖 5・6層出土土器 (1:4)

弥生時代

SD01 幅約25m深さ約1.3mを掘り、東西方向に走る。貝層を切ってつくられており、上部の層部は「上」ではなく「貝」の状況である。掘上は上層=暗灰色シルト(7層)、下層=暗茶褐色土(8・9層。うち8層は破碎された貝殻多く含む)と暗灰色砂質土(10層)が堆積し、特に下層から弥生時代後期後半の土器が多く出土した。切り合い関係と出土遺物から弥生時代後期前半の掘削で、後期後半の埋没と推定できた。

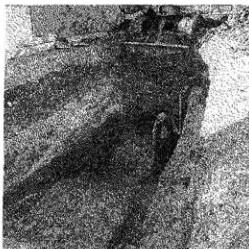


写真8 SD01完掘状況(南東より)

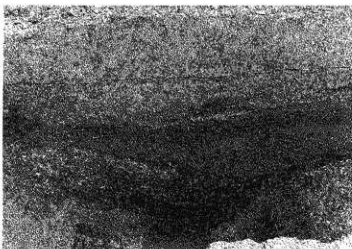
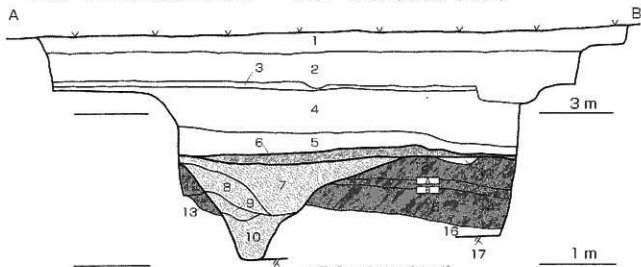


写真9 SD01断面状況(西より)



七層名

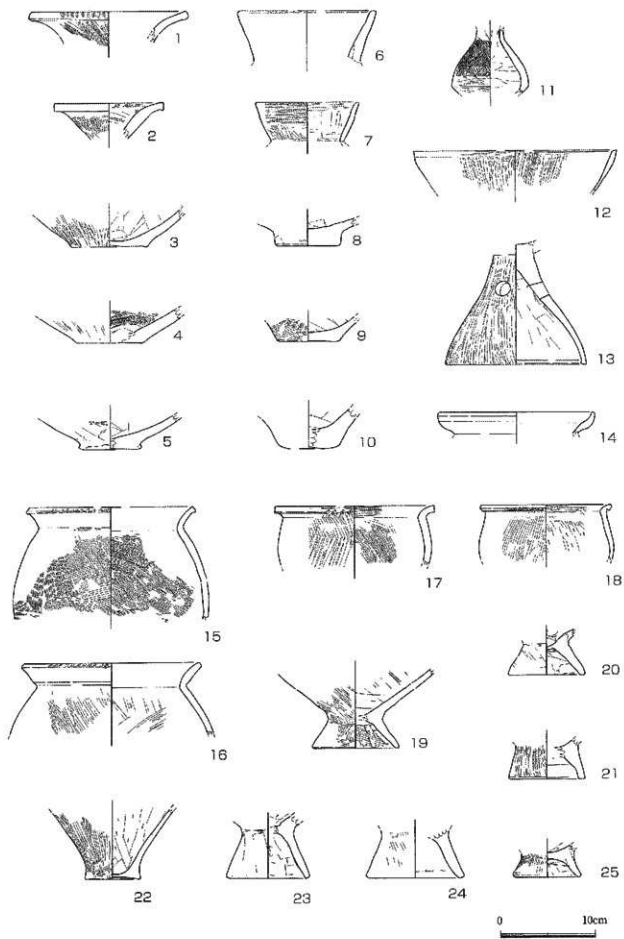
- 1 黄灰色砂(表土)
- 2 黄褐色乱土
- 3 暗茶褐色シルト(炭化物塊かを含む。耕作土か)
- 4 灰色シルト(炭化物圧か。沈積多量を含む)
- 5 灰色・黄灰色・茶褐色の砂(砂層の炭化物塊。中叢山茶碗出土)
- 6 暗灰色シルト(自然木・植物遺体・炭化物多量を含む。弥生土器片・古墳時代遺器・人骨片出土)
- 7 暗灰色シルト(均質。沈積層かを含む。SD01上層)
- 8 暗茶褐色土(沈積多く含む。細かく破碎された貝殻多く含む。SD01下層1)
- 9 暗茶褐色土(沈積多く含む。貝殻は含まない。SD01下層2)
- 10 暗灰色砂質土(沈積多く含む。貝殻は含まない。7層に似るが砂質性が強い。弥生土器多く含む。SD01下層3)
- 11 暗灰色土(貝殻は含まない)
- 12 暗灰色貝層(細かく破碎された貝殻を多量に含む。貝上層)
- 13 暗灰色土(龜山ブロック多量に含む。貝殻は含まない)
- 14 暗色貝層(黒味が強い層がベルト状に連続。貝殻の残りはよくなる。貝下層1)
- 15 暗灰色貝層(黒味が弱く。貝殻の残りは多い。貝下層2)
- 16 暗灰色シルト層(貝殻は僅か。中間の土器片層か)
- 17 灰色・黄灰色砂層(龜山)

※貝ブロックサンプリング

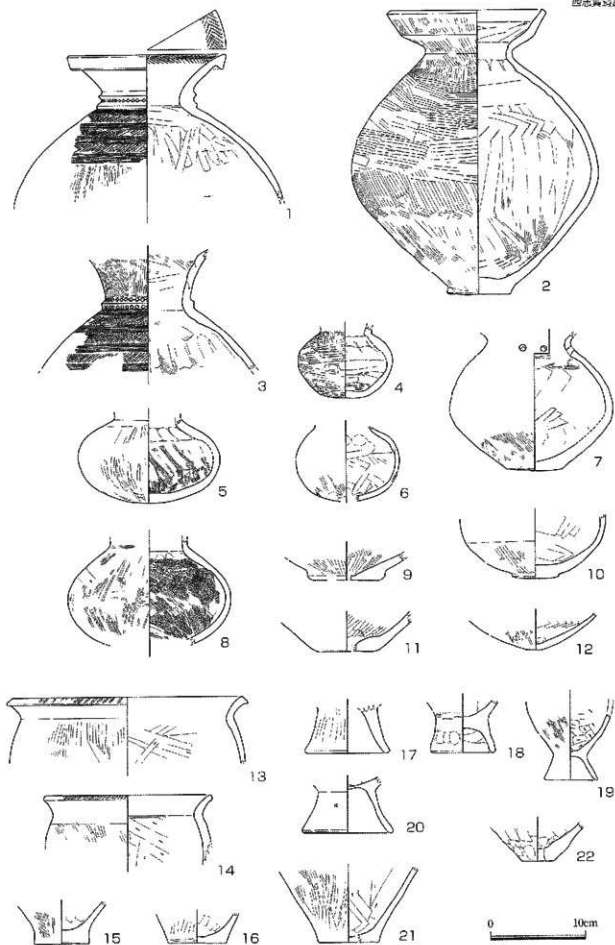
A…東、B…東の2

- 1・2 = 表土
- 3 = 近～現代耕作土
- 4 = 中重～近叢の包含層(耕作土か)
- 5 = 中叢の庄内川氾濫砂層
- 6 = 古墳時代後期の包含層
- 7～10 = 弥生時代後期の溝、SD01掘上
- 12・14・15 = 弥生時代中～後期の貝層
- 16 = 弥生時代中期包含層

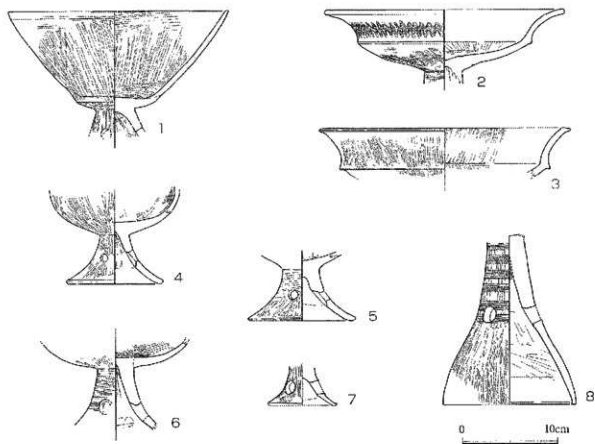
第6図 基本土層図(1:50)



第7圖 SD01上層出土土器 (1:4)



第8図 SD01下層出土土器その1 (1:4)



第9図 SD01下層出土土器その2 (1:4)

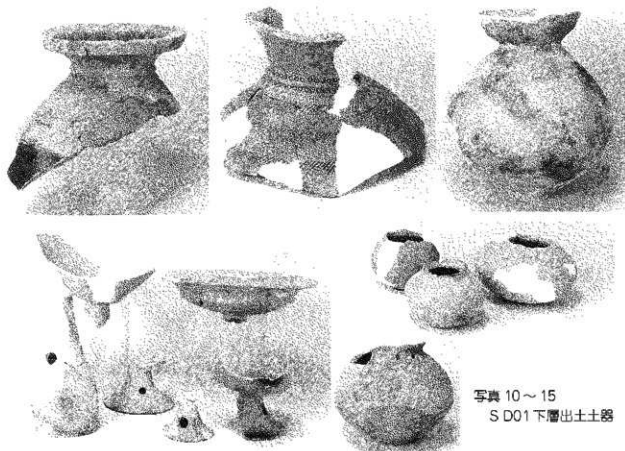


写真 10～15
SD01下層出土土器

貝層 貝層は50cmから1mの厚さで堆積するが、北側が薄く南が厚い。貝層下の地形も北が高く、南に向かって緩やかに低くなっていくようであり、谷側が厚い堆積になっていると推定できた。断面観察では、黒味の強い14層をはさんで、上部12層と下部15層に分けられそうであったが、厳密な掘り分けは不可能であった。なお、貝殻の遺存度も上部が悪く下部が良い傾向にある。貝層中の遺物は少ないが、弥生時代中期後半の土器が目立つ。貝層より下の層からも中期後半の上器が出土していることから、弥生時代中期後半から後期前半にかけての比較的短い期間の形成と推定する。

青灰色シルト層 貝層より下にて中期の土器を検出した。ただし、包含層的な堆積なのか、遺構に伴うものかの確認はできなかった。

なお、当地点では遺賢川式土器等の前期の遺物は出土しなかった。

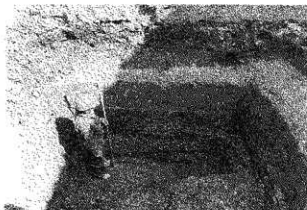


写真 16 貝層堆積状況（西より）

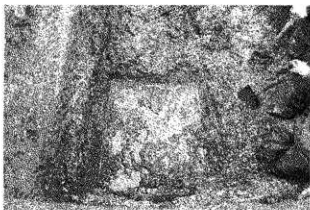


写真 17 青灰色シルト層掘削状況（東より）

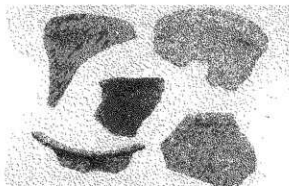


写真 18 貝層出土土器

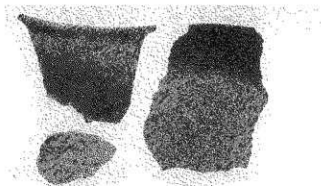
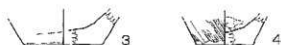
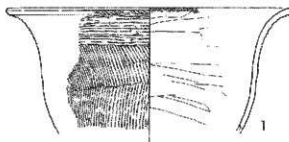


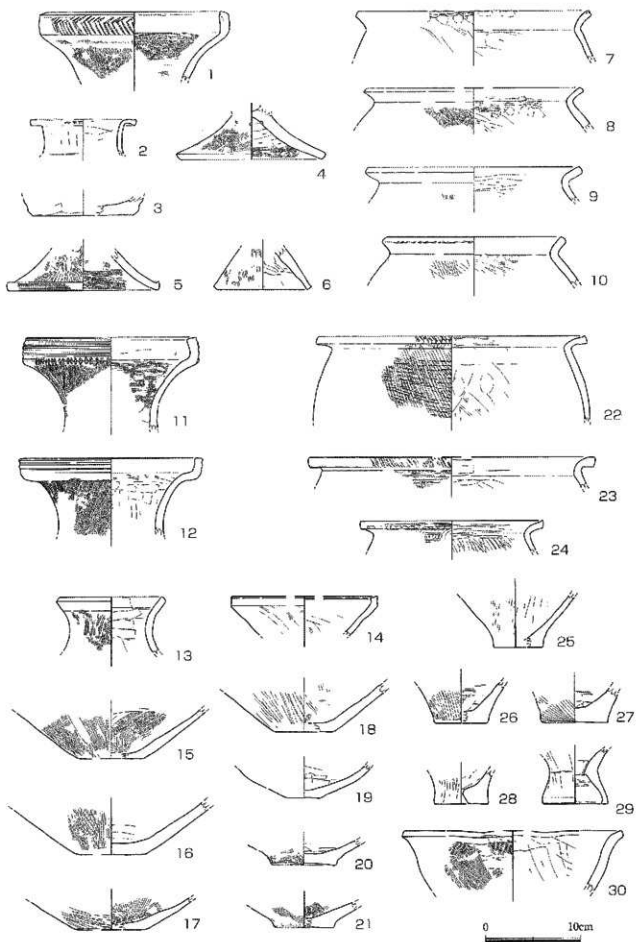
写真 19 青灰色シルト層出土土器



第 10 図 青灰色シルト層出土土器（1:4）



0 10cm



第11图 贝厝出土土器 (1:4)

IV 自然科学的分析

1. 貝層ブロックサンプリングの結果

稲田 隼子

はじめに

今回の発掘調査で貝層が検出され、ブロック・サンプリングを4ヶ所(東側=A、東側の②=B、中央=C、西側=D)で行った(図4)。ブロック・サンプリングはタテ30cm・ヨコ30cm・厚さ10cmで実施。

水洗選別の結果、4つ共に自然遺物と人工遺物を検出した。自然遺物は貝類や動物遺体など、人工遺物は土器片と炭化物片だった。詳しい報告は以下のとおりである。なお、動物遺体についての鑑定等は名古屋大学博物館新美倫子氏に依頼、玉稿を頂いたので本稿ではふれない。

水洗選別の結果

a. 自然遺物<貝類について>

4つのサンプリングで合計14種と5科(種の特が難しいもの)さらに陸産微小貝を検出した(表1)。

サンプリングA:残存状態はやや悪い。腹足綱(巻貝類)が8.31%。アカニシとイボウミナナが1.78%で多く、淡水産のオオタニシ、マルタニシ等も検出。斧足綱(二枚貝類)が91.70%。マガキ58.46%と最も多く、ハマグリ18.69%(殻長70mm)、オオノガイ5.64%と続く。

サンプリングB:残存状態は良い。腹足綱が13.16%でそのうち、ウミナナ2.51%、アカニシ2.19%と続く。斧足綱は86.83%。ハマグリ45.77%(殻長左殻57mm/右殻74mm)、マガキ17.87%(殻長左殻48mm)、ヤマトシジミ12.54%(殻長左殻30mm/右殻34mm)、オオノガイ、シオフキ、サルボウ等を検出。

サンプリングC:残存状態はやや悪い。腹足綱が10.20%でアカニシ0.66%、ウミナナ0.33%。斧足綱は89.91%。マガキが多く64.14%(殻長左殻48mm/右殻54mm)、ハマグリ10.20%、ヤマトシジミ、オオノガイと続く。

サンプリングD:残存状態はやや悪い。腹足綱は8.54%でそのうちアカニシが2.75%と多く、他にフトヘナタリ等を検出した。斧足綱は91.45%である。マガキが59.50%(殻長左殻46mm/右殻56mm)で最も多い。続いてハマグリ14.32%、オオノガイ4.96%、ヤマトシジミ3.86%等である。

また、サンプリングA~Dに1.25~6.91%の割合でウネナシトマガイか?と思われる斧足綱を検出しているが、これは食するために採取したというより、マガキ等の貝を採取したとき一緒に採取してしまったものと思われる。

全体を通して、約90%と圧倒的に斧足綱が多い結果となった。

腹足綱 GASTROPODA	
アカニシ	<i>Rapana thomastana</i> GROSSE
ウミナナ	<i>Baillaria multififormis</i> LISCHKE
イボウミナナ	<i>Baillaria zonitis</i> DRUGUIERE
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophoranus</i> A.ADAMS
オオタニシ	<i>Cyprangopaludina japonica</i> MARTENS
マルタニシ	<i>Cyprangopaludina chinensis mallicata</i> REEVE
アキガイ科	Muricidae SP.
ウミナナ科	Potamididae SP.
タニシ科	<i>Cyprangopaludina</i> SP.
斧足綱 PELECYPODA	
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> THUNBERG
ハマグリ	<i>Meretrix hisoria</i> RODING
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> GMELIN
オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogoi</i> MIYAMA
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME
シオフキ	<i>Macra veneriformis</i> REEVE
サルボウ	<i>Anadonta (Scapharca) subcrenata</i> LISCHKE
ウネナシトマガイ	<i>Trapesium (Neotrapesium) japonicum</i> PILSBRY
マルスダレガイ科	Veneridae SP.
シジミガイ科	Corbiculidae SP.

表1 貝類種名一覧

b. 人工遺物

土器片と炭化物片を多数検出した。前回の西志賀遺跡発掘調査（1995年）でも貝層のブロック・サンプリングを行っており、骨角器の縫針が検出された。今回は残念ながら検出されなかった。（以上、表2）

おわりに

検出した腹足綱・斧足綱共に、内湾水域もしくは淡水域に生息する。また潮間帯から上部浅海帯に生息する。地理的位置も湾中央部や湾奥部で、底質が砂質から砂泥質に生息するものが多い。遺跡の近くに湾が広がっており、食べるのに適した比較的採取しやすい貝が好まれたと考えられる。

1953年の調査ではカキを主体とした純貝層の存在が特筆され、また、1995年の調査ではマガキよりハマグリが主体となっていたが、貝類の種名構成にあまり差は見られない。今回の調査地点と上記2地点は南北方向にほぼ直線上に並ぶが100m位ずつ離れており、1953年次はブロック・サンプリングによる分析ではないので貝類の構成比率を単純に比較したり、貝層の広がりやを言及することはできない。しかし、今後の発掘調査等により西志賀遺跡の全体像をつかむ時これら貝層についての報告も大きな検討対象のひとつとなるであろう。

今回のブロック・サンプリングの分析で、新美倫子氏には動物遺体の鑑定等だけでなく、貝類の分類においても御教示頂いた。本筆ながら、心より感謝申し上げます。

種名	A				B				C				D			
	左殻	右殻	最小体径	%	左殻	右殻	最小体径	%	左殻	右殻	最小体径	%	左殻	右殻	最小体径	%
アカニシ		6		1.78		7		2.19		2		0.66			10	2.75
アカニシ片		+				+									+	
アケホガイ科		1		0.30		+										
ウミナナ		1		0.30		8		2.51		1		0.33				
イボウミナナ		6		1.78		+		0.31								
イボウミナナ片						+										
フトヘナタリ														1		0.28
フトヘナタリ片						+										
ウミナナ科		5		0.89										6		1.65
ウミナナ科片		+				+								+		
ウミナナ科片		2		0.59		3		0.94								
マルタニシ		2		0.59												
タニシ科						+										
不明のもの		7		2.08		23		7.21		28		9.21		14		3.86
小計		28		8.31		42		13.16		31		10.30		31		8.54
マガキ	197/130	197		58.46	57/29	57		17.87	195/119	195		64.14	216/146	216		59.50
ハマグリ	61/33	61		18.69	142/132	142		45.77	19/20	20		6.31	33/32	32		14.32
ハマグリ 左右不明	4+2	2			8+2	4		1.46	21+2	11		3.1				
オホシジミ					1			0.31								
オホシジミ科					6/13	13		4.17	4/3	4		1.32	1/4	4		1.10
オホシジミ科片	8+2	4		1.19	8+2	4		1.32					13+2	7		3.03
オホシジミ科片	19/9	19		5.64	7/3	7		2.19	9/11	11		3.62	18/18	18		4.96
オホシジミ科片	9/9	9		2.97	38/40	40		12.54	11/6	11		3.62	14/8	14		3.88
オホシジミ科片	2+2	1														
オホシジミ科片					3+2	2		0.63								
オホシジミ科片					2/2	2		0.63								
オホシジミ科片	1/1	1		0.30	1/1	1		0.31								
オホシジミ科片	3+2	2		0.60	4/4	4		1.25	21/19	21		6.91	17/15	17		4.68
不明のもの													8+2	4		1.10
不明のもの						+										
小計		309		91.70		257		86.63		273		89.81		332		91.45
合計		337		100.01		319		99.99		304		100.01		363		100.09
種小貝		38				31				54				32		
不明のもの		4				2				3				4		
土器片		45				133				12				17		
炭化物片		8				77				59				82		

表2 ブロック・サンプリング検出遺物構成表

2. 動物骨・人骨について

名古屋大学博物館 新美倫子

西志賀遺跡の第2次調査では古墳時代と弥生時代の動物骨・人骨が130点出土した。これらの内訳は、古墳時代の資料が人骨45点と種不明陸獣骨破片2点の計47点であり、弥生時代の資料が魚類16点、カエル類1点、ヘビ類40点、種不明鳥類4点、ネズミ類7点、キツネ1点、イノシシ類2点、種不明陸獣骨破片12点の計83点である。表3・4にこれらの出土量を示し、以下にその内容について述べることにする。

古墳時代に属する資料は、包含層中に散乱した状態で出土したのを発掘時に取り上げたものである(表4)。人骨45点のうち、頭蓋骨と下顎骨は一緒に出土しており、上・下顎の第2後臼歯が萌出途中であることから10歳前後と考えられる。第一頸椎・肩甲骨・上腕骨・寛骨・大腿骨・胫骨(左右の近位端)・踵骨・中足骨・基節骨・鎖骨と椎骨3点は、関節部の状態や骨質から見て、いずれも若い個体のものである。寛骨は腸骨のみが見られ、これはまだ座骨・恥骨と癒合していない。これらに対して、胫骨(左中間部)・腓骨と椎骨4点は成人のものと思われ、少なくとも2人分の人骨が混在していると考えられる。なお、前者は個体の年齢が若いために、また後者は四肢骨・椎骨のみであるため、性別は不明である。

弥生時代の包含層には、弥生中期後半～後期前半に形成された貝層と弥生後期後半に属するSD1埋土があり、貝層中では4カ所でブロックサンプル(30cm×30cm×10cm)が採集されている。弥生時代の資料のうち、種不明陸獣類破片1点のみがSD1埋土から出土し、それ以外の資料は全て貝層中から出土した。貝層出土資料のうち、イノシシ類肋骨1点と種不明陸獣類破片1点は発掘時に取り上げられたが、その他の資料はブロックサンプルを2mm目のふるいで水洗選別して検出された。

魚類の出土量はサンプルAで1点、Bで7点、Cで2点、Dで6点と少ない(表3)。コイの椎骨・咽頭歯破片とウナギ・アイナメ類・フナ類の椎骨、タイ類の歯が少量見られた。アイナメ類は体長20cm程度の資料であり、フナ類は体長十数cmの小さな個体である。カエル類の趾蹼骨は現生アカガエルより小型の種である。鳥類4点は種不明の四肢骨破片であり、ネズミ類7点はいずれも現生ドブネズミよりもかなり小さい資料である。キツネは左肩甲骨が1点出土し、イノシシ類は先に述べた肋骨1点と左上腕骨遠位端の2点が見られた(表4)。

サンプル	種	部位・出土層	計
A	コイ	咽頭歯破片1	1
B	コイ	椎骨1, 咽頭歯破片2	7
	ウナギ	椎骨1	
	アイナメ類	椎骨1	
	種不明	椎骨1	
	タイ類	歯1	
C	フナ類	椎骨1破	2
	種不明	椎骨1	
D	種不明	椎骨1破	6
	タイ類	歯5	

註 破・壊れた資料。

表3 魚類出土量

時期	種	部位・出土層	計
古墳 期	ヒト	頭蓋骨破片は12個体分 + 上顎骨 [左12C (P2M12) P2未出、M2萌出途中 右12C (P2M12)] 下顎骨 左 [112CP1m2M123] C新出はじめ、P1-M2萌出途中 右 [112CP1m2M123] M3未出、関節突起なし 左上M3, 右Dm1, 第1指骨1本 肩甲骨右1本、上腕骨右1本、寛骨(腸骨のみ)右1本 大腿骨右1本、腓骨左1本、右1本、踵骨左1本 中足骨1本、基節骨1本、鎖骨右1本、松骨3本 胫骨五中間部1、腓骨五中間部1、椎骨4 四肢骨破片5、肋骨18	47
	種不明	破片2	
	カエル類	趾蹼骨右1	
弥生 期	ヘビ類	趾蹼骨0	67
	鳥類	破片4	
	ネズミ類	下顎骨左1, 大腿骨左1, 右1本, 椎骨左1, 右1, 椎骨2	
	キツネ	肩甲骨左1	
	イノシシ類	上腕骨左下1, 肋骨1 陸獣類破片12	

註 上・下顎、心臓、肝臓、胆嚢、肺、腸、腎臓、二乳白歯、[・?]等号に併う数字は歯の顆を、()は付いていることを示す。上・下顎骨、下顎骨破片、上・下顎の骨のものは必ず実寸のもの、破骨・臼歯、その他のものは成人または幼童。

表4 両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類出土量

V おわりに

今回の調査は個人住宅の建設に伴うもので、小規模の調査であったが、多くの成果を得た。

まずは当地点の変遷をまとめておく。

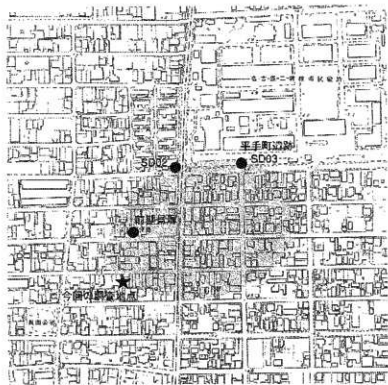
- ① 弥生時代中期 遺構は不明であるが土器確認。
- ② 弥生時代中期後半 貝塚の形成
- ③ 弥生時代後期前半 溝掘削
- ④ 弥生時代後期後半 溝へ土器廃棄、埋没開始
- ⑤ 古墳時代中～後期 湿地状環境
- ⑥ 中世 庄内・矢田川の氾濫と水田?湿地?
- ⑦ 近世 水田

さて、検出した溝状遺構の性格については不明であるが、幅約2.5m深さ1.3mの規模は、集落をめぐる環濠の一部と考えても遜色無いであろう。可能性のひとつとして強引に1995年調査地点SD02・平手町遺跡SD03と今回の地点をつなげば、短軸150mから長軸250mほどの楕円範囲を居住域として推定できようか。ひとつの案として、今後の調査の参考に第12図に提示しておく。

また、6層から出土した人骨は、新美先生の分析により複数人のものであることが明らかとなった。6層は自然木や植物遺体を多量に含むことから、水の流んだ湿地状の環境を推定したが、出土の人骨は2体以上であったことで、近くに墓塚を想定することも可能であろう。居住域から墓域への変化など、土地利用の変遷の解明も今後の重要な検討課題である。

参考文献

- 名古屋市見晴台考古資料館 1996 『西志賀遺跡・発掘調査の概要』 名古屋市教育局委員会
- 水井宏幸 2000 『平手町遺跡』 『平成11年度愛知県埋蔵文化財センター年報』 (財)愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 北村和宏・西原正佳・永井宏幸 1998 『志賀公園と西志賀遺跡、調査の軌跡と再評価』 『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報 平成9年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- 名古屋市見晴台考古資料館 2001 『特別展 はじまりのムラ』
- 杉原莊介・岡本勇 1961年 『25愛知県西志賀遺跡』 『日本農耕文化の生成第 冊本文籍』



第12図 居住域推定図 (1:5000)

松ヶ洞 14号墳

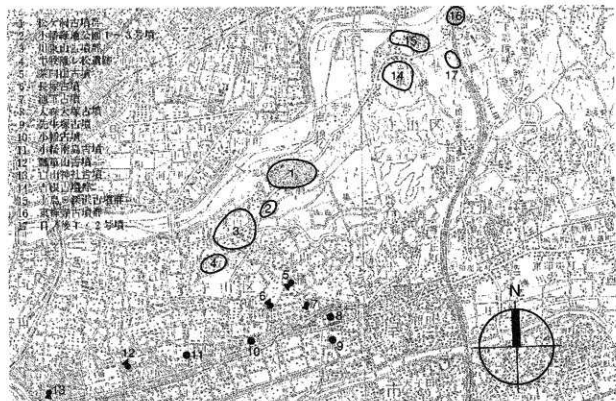
目次

I	はじめに	21
	1. 位置と環境	21
	2. 古墳群の概要	21
	3. 過去の調査	22
II	調査の経過	22
	1. 調査の経緯	22
	2. 日誌抄	23
III	調査の内容	23
	1. 墳丘	23
	2. 主体部	26
	3. 外部施設	26
	4. 墳丘構築前	28
	5. 遺物	28
IV	おわりに	30



例 言

1. 本編は、松ヶ洞14号墳発掘調査の報告である。
2. 調査地点は名古屋市守山区大字古根字松洞3254・261である。
3. 調査は個人住宅の建設工事に伴うもので約150㎡を対象とした。
4. 調査期間は、平成12年9月14日～10月20日まで行なった。
5. 調査は名古屋市教育委員会が実施し、調査に関する調整事務は、文化財保護室学芸員小島一夫が担当した。発掘調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員服部哲也・細瀬茂が担当し、藤井康隆の協力を得た。
6. 掘削工事は(有)平田造園に請負契約、基準点・水準点・地形測量業務は(株)カナエジオマテックスに委託契約して実施した。
7. 資料整理・報告書の作成作業参加者。
小浦美生、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木佳子、山本雅代
8. 本編の執筆は服部がおこなった。



第1図 位置と周辺の遺跡(国土地理院 1:25000)

I はじめに

1. 位置と環境

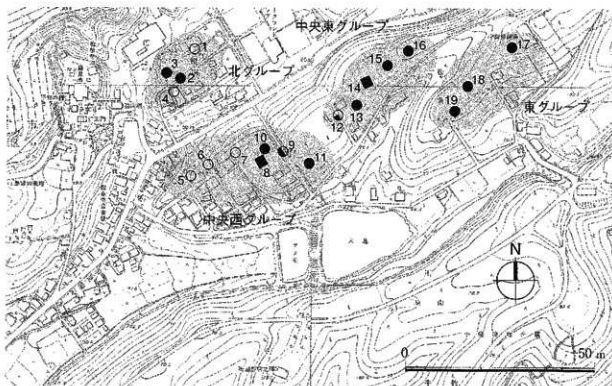
松ヶ洞古墳群は、守山区吉根字松洞に所在する。守山区は名古屋市内で最も北東の区であるが、古根地区は守山区のほぼ中央に位置している。古墳群は、尾張四観音のひとつである竜泉寺の東側にあたり、ガイドウェイバス「竜泉寺」からは徒歩5分の距離である。

地形的には東から延びる丘陵の西端上に立地し、標高は70から80mである。古墳の立地する丘陵北下には庄内川が南西に流れ、古墳群からは春日井市の高塚山から台地面を広く望むことができる。

2. 古墳群の概要

守山区の古墳の分布を概観すれば、東より上志段味地区、吉根・下志段味地区、川地区、小橋・守山地区の4つに大きくわけることができる。各地区の主な特徴をあげれば、上志段味地区には、白鳥塚古墳をはじめとする前期前方後円墳、志段味大塚・勝手塚古墳などの中期帆立貝式前方後円墳、そして東谷山古墳群の後期群集墳が分布。吉根・下志段味地区には、中期から後期の敷基単位の古墳群と後期の群集墳が分布。川地区は、北の松ヶ洞古墳群、南の川東山古墳群に大別できるが、牛牧離れ松遺跡の方墳を含め、5世紀後半から6世紀前半の横穴式石室以前の内部主体の古墳を中心として分布。小橋・守山地区では前期から後期の前方後円墳が散在して分布する（第1図）。

松ヶ洞古墳群は川地区の中では北に位置し、約20基からなる。前述のとおり、東から延びる丘陵の西端上に立地するが、その丘陵はいくつかの侵食谷に刻まれており、古墳群も3つの枝丘陵上に分かれている。北の枝丘陵には1号から4号墳が、中央の枝丘陵には5号から16号墳が、南東の枝丘陵には17号から19号墳



第2図 松ヶ洞古墳群分布図 (1:5000)

が立地する。さらに中央の群は東群と西群に分けることが可能であり、結果、松ヶ洞古墳群は3基から7基を単位とする、4つのグループよりなると言えよう(第2図)。なお、古墳群のさらに500m南の枝丘陵上には、小幡緑地1号墳～3号墳が立地するが、松ヶ洞古墳群の支群との理解もあり(松ヶ洞20～22号墳)、これを含めれば、5グループとなる。

3. 過去の調査

松ヶ洞古墳群は、昭和30年代に7基が発掘調査されている。代表的なものの概略を記す。

8号墳は一辺約8mの小規模な方墳であったが、外部施設として円筒形・朝顔形の埴輪・葦石が墳丘をめぐる。主体部は2基の粘土槨で、棺は粘土の痕跡から割竹形木棺と推定できた。1号棺からは六鈿鏡・玉類、2号棺からは藤手文鏡・玉類・鉄製武器(剣・鎌・刀子)が出土した。また、墳丘西辺中央の斜面裾部からは、須恵器(はそう・脚付七連蓋環)が集りして出土、南辺中央の斜面からは家形埴輪が出土し注目されている。副葬品の年代観から5世紀の末頃の築造と推定される。

9号墳は直径16mの円墳。外部施設としての葦石は無く、円筒埴輪も墳頂部に僅かの出土で墳丘は囲まれない。主体部は、小口部のみに粘土を使う簡略化した粘土槨2基と、木棺直葬1基の計3基である。北棺からは鉄製馬具、鉄製武器(直刀・鎌・刀子)、中央棺からは鉄製馬具、鉄製武器(直刀・鎌)、南棺からは鹿角製轡が部分的に遺存する鉄製刀子が出土した。そのうち、北棺出土の複環双葉形と呼ばれる鏡板は、舶載品の可能性のあるものであり注目される。また、墳丘南西の斜面裾部から須恵器(壺・蓋環)が出土している。副葬品の年代観から5世紀の末～6世紀前半の築造と推定される。

13号墳は直径約18mの円墳で、群中最大の規模である。墳丘裾には葦石が巡るが埴輪は破片が採取されるにとどまる。主体部は割竹形木棺の痕跡を僅かに確認されているが、副葬品は見つからなかった。その他の遺物も墳丘から須恵器・土師器片が僅かに出土したのみである。今回調査の14号墳からは、南西約30mの位置であり関連は最も注目される。

なお、1966年の報告に、「14号墳の墳頂に真刀が露出していたのを緊急調査して、・・・」の一文が見られるが、その内容および鉄刀の所在は不明である。

II 調査の経過

1. 調査の経緯

平成12年5月、市教育委員会文化財保護室に当該地での住宅の建築工事の予定と、その際の埋蔵文化財の取扱についての照会があった。文化財保護室では早速に現地踏査を行い、予定地内に松ヶ洞14号墳が遺存することを確認したうえで、建築の変更の可能性を含めて事業者と協議調整。結果、平成12年9月より発掘調査を実施することとなった。

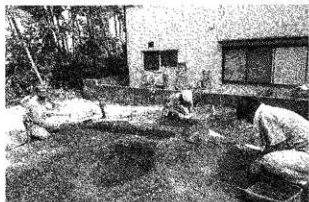
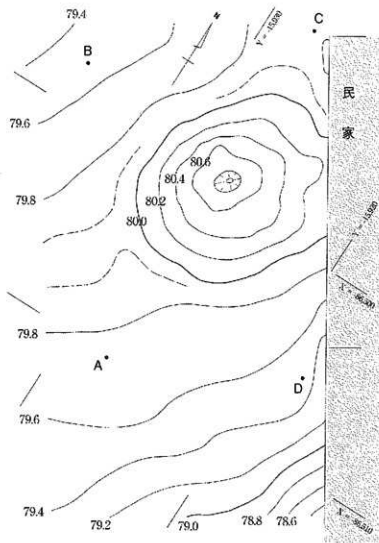


写真1 作業風景

2. 日誌抄

- 9月14日 発掘準備。
 9月15日 伏探。現況測量。
 9月18日 伏探。道具類の搬入。表土除去開始。
 9月19日 表土除去。調査区設定。
 9月20日 墳丘上の調査。トレンチ設定。
 この間トレンチ内調査。適宜写真撮影。測量。
 10月10日 周溝確認。
 10月11日 周溝掘削。周溝内より須恵器出土。
 10月18日 周溝完掘。測量開始。写真撮影。
 10月20日 埋め戻し完了。後片付け。現地での調査終了。



第3図 調査前地形測量図 (1:200)

III 調査の内容

1. 墳丘

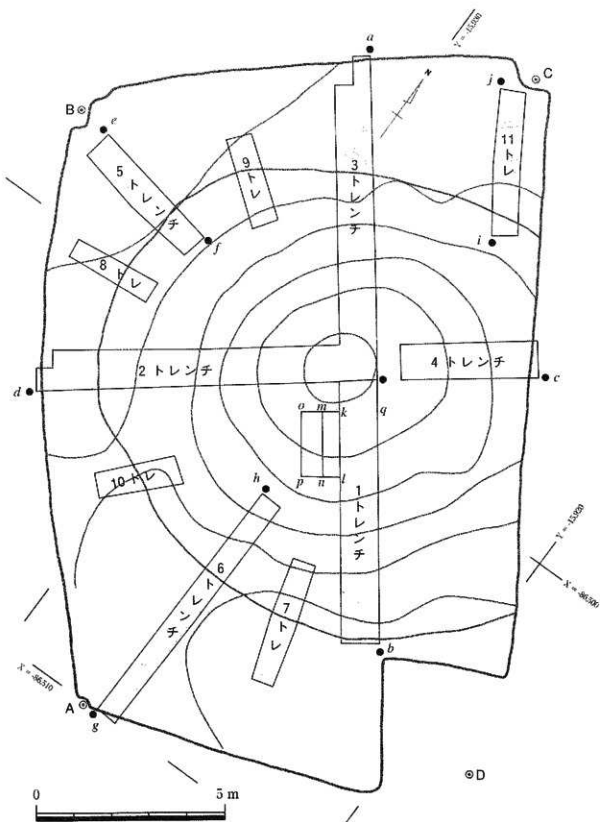
調査前の現状は、直径約10mほどの円墳状で、墳頂部には1m～1.5m、深さ50cm程の盜掘坑が残る。また、墳丘東裾部は東隣の宅地によって僅かながら壊されているようであった(第3図)。

表土除去後の測量では、南北約12m、東西は東端がカットされているものの14mほどの墳丘が推定でき、東西に細長い楕円形状となっていた。高さはきわめて低く、約1mが残るにすぎない(第4図)。

墳形 調査の結果、墳丘裾部分には周溝が遺存することが明らかとなり、周溝の形状をもとに墳形を確認することができた。一辺約10mの方墳で、南北の軸はN-38度-Wに振れる。表土除去直後の墳形と比べれば、南コーナー部分の封土流出が著しかったことがわかる(第7図)。

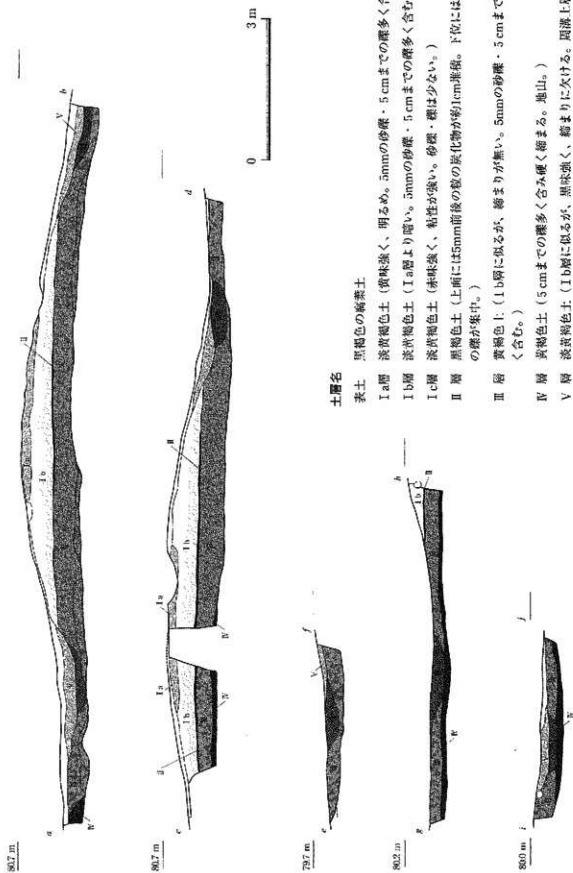
盛土 墳丘トレンチの観察から、墳丘盛り土は基本的にI層の一層であり、版築等の土質を混えた構築は認められなかった。ただ、上位では黄味が強く明るめのa層、a層よりやや暗いb層、赤味、粘性ともに強いc層に細分が可能で、工務的なある程度の時間差は認めることができよう(第5図)。

断面観察で確認できた盛り土の厚さは、墳頂付近で約60cmとなり、墳丘の残り具合は当初の予想以上に悪いことが明らかとなった。



第4図 表土除去後墳丘測量図およびトレンチ設定図 (1:100)

第5図 堤丘断面図 (1:80)



土層名

表土 黒褐色の腐葉土

I a層 淡黄褐色土 (黄味強く、明るめ、5mmの砂礫・5cmまでの礫多く含む。)

I b層 淡黄褐色土 (I a層より暗い、5mmの砂礫・5cmまでの礫多く含む。)

I c層 淡黄褐色土 (赤味強く、粘性が強い。砂礫・礫は少ない。)

II 層 黒褐色土 (上面には5mm前後の粒の炭化物が約1cm単独。下位には5mmの礫が集中。)

III 層 黄褐色土 (I b層に似るが、締まりが無い。5mmの砂礫・5cmまでの礫多く含む。)

IV 層 黄褐色土 (5cmまでの礫多く含む硬く締まる。地山。)

V 層 淡黄褐色土 (I b層に似るが、黒味強く、締まりに欠ける。固着上層土。)

VI 層 淡黒褐色土 (やや黄味帯びる。粘性、締まりともに弱め。固着下層土。)

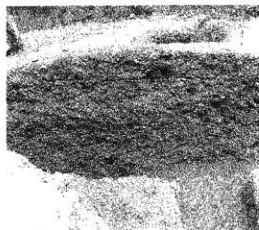
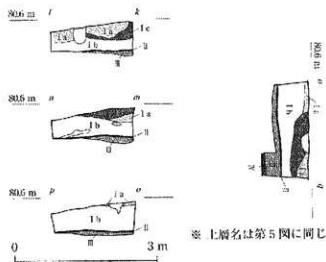


写真2 墳頂付近断面状況 (南西より)



第6図 墳丘中央部断面図 (1:80)

2. 主体部

墳頂南の地点で、赤味と粘性が強く礫が少ない淡黄褐色土をわずかに確認した。主体部にかかわる粘上の可能性も考えて、慎重に調査を進めたが、結果は盛り土の一部 (I c層) としか考えられない状況 (第6図) であった。さらに、盛り土下部や、炭化物層以下についても調査を行ったが、主体部らしい遺構は検出できなかった。主体部が当初より無かった可能性は残るが、墳丘も60cmほどしか遺残しなかったことから考えても、残念ながら主体部は削平されて消失したとすることが妥当であろう。

そして、主体部があったとすれば、周辺に石室材に使えそうな石が全く見られないことから、簡易な粘土塚か、木棺直葬と推測する。

3. 外部施設

葺石・埴輪は全く認められず、周溝のみを確認した。

周溝は、幅1.5m～1.8m、深さ約40cmを測り、断面形状は逆台形を呈す。部分的に浅くなったり、狭くなったりすることは無く、ほぼ同規模のまま、四周するものと思われるが、東辺は調査区外のため未検出である。上層に淡黄褐色土 (V層)、下層に淡黒褐色土 (VI層) の二層が堆積するが、特に上層のV層は、盛り土I b層に酷似していた。比較的早い段階に墳丘は崩落し、周溝内に流入したものと推測できた。

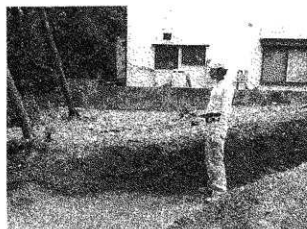


写真3 北辺周溝断面 (南西より)

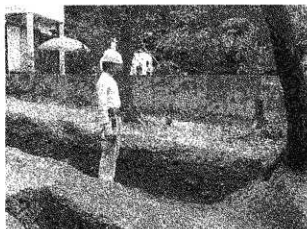
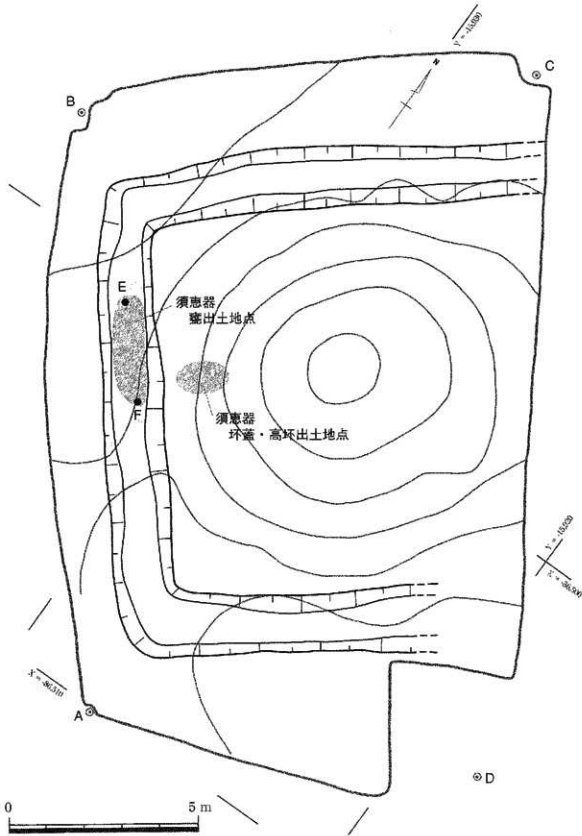


写真4 南辺周溝断面 (南西より)



第7図 墳丘測量図および周溝平面図 (1:100)

4. 墳丘構築前

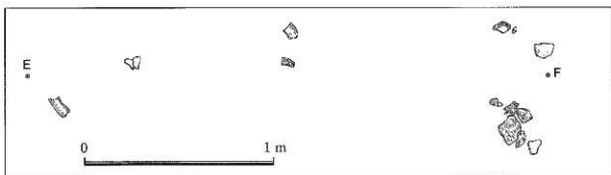
墳丘盛土のⅠ層と地山のⅣ層との間には、Ⅲ層と呼んだ黄褐色土が堆積した。Ⅲ層は周溝の外にまで広がるが、締まりが無いなどの観察結果から、人工的なものと判断した。このⅢ層上面はひじょうにフラットに整えられていることから、墳丘構築以前の整地土と考えられよう。

また、Ⅰ層とⅢ層の間には炭化物層（Ⅱ層）が堆積した。炭化物は平均1cmほどの厚さで、墳丘下全面に広がっていた。ただし、墳丘の中心部付近が厚く、縁辺に向かって薄くなっていく傾向にあり一律ではない。炭化物層下には焼けた様子も無いことから、炭化物を撒いた（敷いた）可能性が高い。遺物を全く伴わなかったため、その意味するところの判断は難しいが、Ⅲ層による整地後で墳丘構築前（周溝底には全く認められないので、周溝掘削の前でもある）の祭祀や縄張りのな目印の可能性を考えておきたい。

5. 遺物

前述のように主体部は遺存しなかったため、主体部への副葬品は不明である。また、周溝埋土中への副葬品流入をも想定したが、それらしい遺物は検出できなかった。なお、報告書〔名古屋市教育委員会 1966〕記載の「直刀」については、その後所在不明であり確認できなかった。

今回の調査での出土遺物は少なく、墳丘西斜面上から須恵器坏蓋（1・2）高坏（3）、その直下の周溝内から甕（5）が出土した他は、墳丘盛土内から土師器の小片数点が出土したにとどまる。墳丘西斜面と周溝内から出土した須恵器は、同一地点で行われた葬送儀礼もしくは墓前祭祀に伴う供献土器であろう。これら須恵器は東山窯編年のIII1からIII10期であり、5世紀末～6世紀前半の年代観が想定できる。



第8図 周溝内須恵器出土状況（1:20）

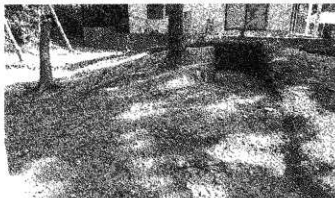


写真5 墳丘西斜面出土須恵器（南西より）



写真6 周溝内出土須恵器（南西より）

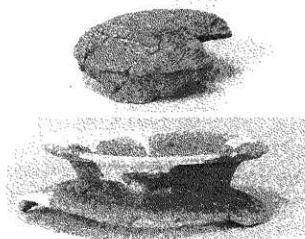
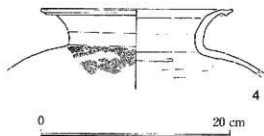
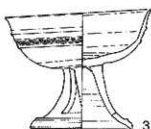


写真7~9 出土須恵器



第9図 出土須恵器 (1:4)



写真10 調査前 (南より)

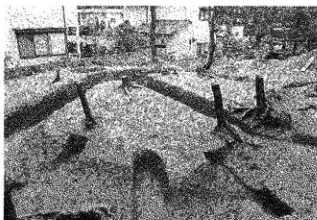


写真11 完掘状況 (西より)



写真12 完掘状況 (南より)



写真13 墳丘断面状況 (南西より)

IV おわりに

今回の調査は個人住宅の建築工事に伴うもので、14号墳1基が対象であった。調査前は直径10mほどの円墳状であったが、現況でもマウンドがかなり低かったため、墳丘上部は壊されていることが心配された。結果は、やはり柵を取めた主体部は消失して残っておらず、ここに葬られた人を主体部や副葬品から想定することは不可能であった。

その中で、今回の最も大きな成果は、方形にめぐる周溝を検出したことであり、墳形が円墳ではなく一辺約10mの方墳であったことを明らかとした。隣接する13号墳は、葺石の状況から円墳であることが確実であり、同古墳群には方墳・円墳が混在することをあらためて確認することとなった。

また、同古墳群内では方墳には8号墳が知られている。8号墳は墳丘規模こそ一辺約8mと小規模であったが、円筒埴輪が巡り、粘土部二基を内部主体とするもので、鏡・玉・剣の副葬品も出土している。14号墳の消失前の主体部・副葬品の参考にはなろうが、埴輪・葺石の違いなどから単純に復元モデルにすることもできない。

同古墳群内では、墳形＝方・円、墳丘規模＝8m～18m、内部構造＝粘土部・粘土一部使用・木棺直葬、埴輪＝墳丘を囲む・囲まない・無し、葺石＝有・無、副葬品＝多・少・無とむじょうにバラエティであり、かつ単純に墳丘規模大＝主体部厚葬＝副葬品多とはなっていないことに特徴がある。今後、これらの要素を再整理し、群の中での階層差を考えることを検討課題のひとつとしておきたい。

なお、群の他の古墳と共通する点には、方墳の主軸方向が8号墳（N・35度・W）とほぼ同じであることや、墳丘西側で須恵器が集中して出土した（8号墳9号墳などと同じ）ことがある。前者については、墳丘構築にあたって同じ企画によった可能性があらうし、後者は同じ葬送儀礼や墓前祭祀が行われていた可能性があらう。

さて、松ヶ洞古墳群は5世紀後半から6世紀前半までの短い間に形成された所謂古式の群集墳である。そして古墳群の内から周辺へ目を転ずれば、同時期では守山地区の前方後円墳との関係、名古屋台地部で見つかっている方・円墳群との比較。また、その後の時代では、上志段味地区や吉根地区の横穴式石室を主体とする新式群集墳との関係など、検討の課題は多岐に渡る。今回の調査をきっかけとして、継続した検討を行っていきたい。

文献一覧

- 犬塚康博 1997 『第4章古墳時代』『新修名古屋市史』第1巻
- 尾野善裕 1998 「古墳時代旅投壺編年の再検討」『古墳時代須恵器の年代観』『古墳時代の旅投壺と湖西産』第4回三河考古合同研究会資料
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 名古屋市教育委員会 1966 『守山の古墳 調査報告第1』
- 名古屋市教育委員会 1969 『守山の古墳 調査報告第2』
- 守山市教育委員会 1963 『守山の古墳』

桜台高校遺跡 (第3次)



例 言

- 一、本編は、桜台高校遺跡の第3次発掘調査の報告である。
- 二、調査地点は、名古屋市南区若草町85番2、85番3、85番4、85番6である。
- 三、調査期間は、平成12年11月1日から平成12年12月1日までおこなった。
- 四、調査は、個人住宅建築工事にとまない、約80㎡を対象とした。
- 五、本調査にかかる調整事務は教育委員会文化財保護室がおこない、現場調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員 藤井康隆、伊藤正人が担当した。
- 六、本報告を作成するにあたり、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐氏、金子健一氏から多大のご教示を賜った。
- 七、遺構図面および出土遺物の整理作業にあたり、岡地田津の協力をえた。
- 八、本報告の編集、執筆は藤井がおこなった。

目 次

一、遺跡の概要	33
二、第3次調査の概要	33
1 調査日誌抄	33
2 第3次調査地点と調査経過	35
三、遺構と遺物	37
1 溝	37
2 土坑	38
3 ビット	39
まとめ	40

一、遺跡の概要（図1）

桜台高校遺跡は、熱田層により構成される標高14m程度の笠寺台地上に立地する。当遺跡は弥生時代から平安時代にかけての遺跡として認識されている。周辺は、同台地上でもとくに遺跡が密集する地域で、弥生時代から中世までの遺跡が知られる。ごく近在の遺跡には、弥生時代の環濠集落として周知の見晴台遺跡や、古墳時代の埴輪をもつ方形周溝墓を検出した扇田町遺跡、中世城館関連遺構が存在する桜小町城跡や春日町野遺跡などがあり、この地域に人々が居住し、盛んに活動したことがわかる。

当遺跡が注目される経緯は、昭和26年に北村敏夫らによっておこなわれた発掘調査であった。北村らは、市立桜台高校構内で、弥生時代後期の住居址、古墳時代・奈良時代の須恵器を検出した。また、昭和29年に校庭西側での校舎新築の際、平安時代の陶馬2個体が発見されている。

当市教育委員会では、いままでに2度の発掘調査を実施している。第1次調査は、昭和53年に運動場改修工事のおり、遺物が発見されたことから、緊急調査をおこなったものである（名古屋市教委1979）。このときには、古墳時代以降のものとは推定される竪穴住居址3棟、溝2条、土坑2基を検出した。土坑は土坑墓であったらしく、鏡匣とおもわれる木片が付着した洲浜菊花双雀鏡1面、砥石と鉄製短刀が出土している。これらの遺物は、平安時代末頃のものである。第2次調査は、1995年に、個人住宅建築工事にもなって実施した（名古屋市教委1996）。15世紀初頭頃までの建物跡、溝や土坑などの遺構、および遺物、16世紀初頭までの溝や井戸、および遺物が検出されている。遺物は陶器や少数の火打石であった。

これらの調査成果により、当遺跡に古代・中世の良好な遺構が残存していることが判明し、該期の当地域のようすをうかがうことができるにいたったのである。

二、第3次調査の概要

1 調査日誌抄

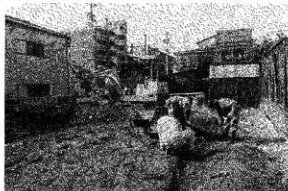
11月1日～7日 準備期間。

8日～9日 表土掘削。SD1、SD2、SK1のプランを検出。基準点・水準点測量。



- | | |
|----------|---------------|
| 1 桜大北遺跡 | 7 桜第1遺跡・見晴台遺跡 |
| 2 桜中村遺跡 | 8 春日町野遺跡 |
| 3 扇田遺跡 | 9 見晴台遺跡 |
| 4 桜台高校遺跡 | 10 戸部一色遺跡 |
| 5 桜木町遺跡 | 11 戸部城跡 |
| 6 弥生町遺跡 | 12 新瀬町遺跡 |

図1 桜台高校遺跡の位置



写1 調査風景（1）



写2 調査風景（2）

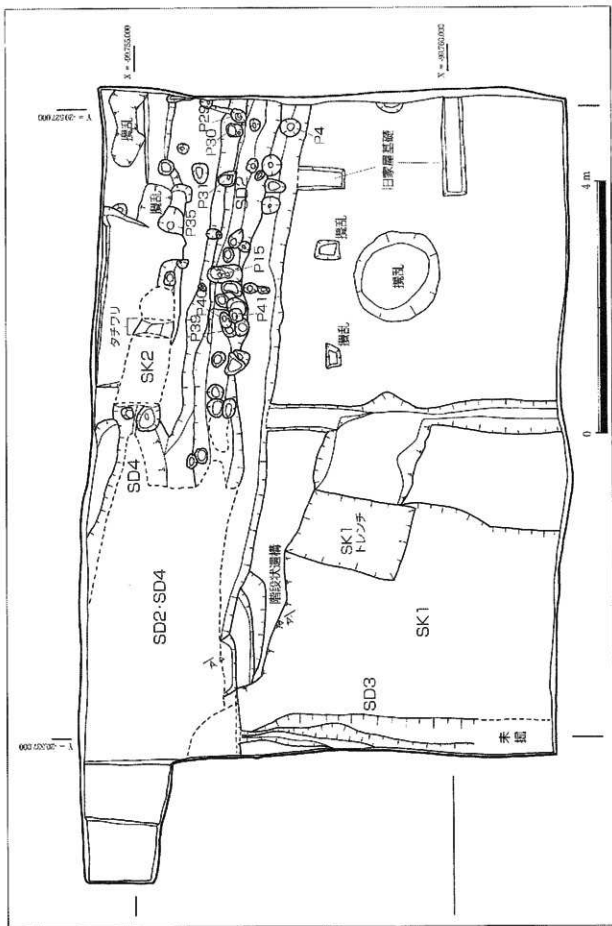


図2 調査区平面図

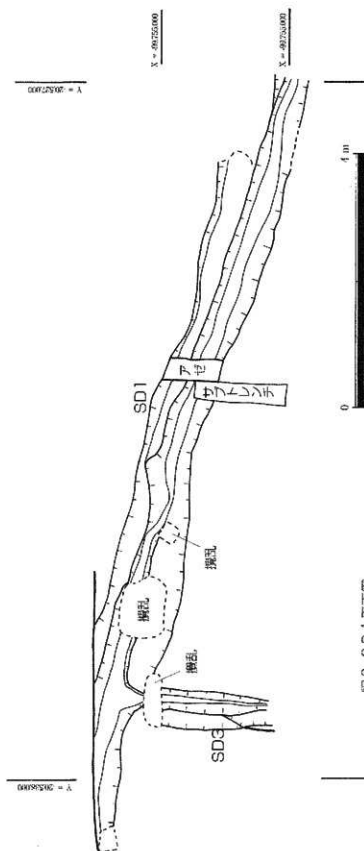


図3 SD1平面図

- 10日 SD1完掘、写真撮影、平面図作成。
SD2掘削。SD3検出。
13日 SD3掘削、平面図を一部作成。建築業者米跡。
14日 SD2掘削を継続。SD2東半部底面に多数のピットが密集していた。SD3を完掘、平面図作成。
15日～20日 SD2の掘削および平面図作成・写真撮影。雨天休工がおおく、あせる。
21日～23日 調査区全景写真撮影。
24日～28日 調査区平面図および断面図作成。
29日 埋め戻し。
30日～12月1日 器材撤去、調査完了。

2 第3次調査地点と調査経過

今次調査は、個人住宅建築にともない、約80㎡を対象とした。調査地点は、桜台高校遺跡のなかでも周縁部にあたる。台地上にきれこんでくる谷地形の斜面上に立地するが、住宅地化までの過程で斜面はすでに削平されており、調査区の東側大半では、地山の熟田層下位層をなす黄灰白色砂が露出にちかい状況であった。包含層はほとんど残存せず、遺構はすべてこの地山面での検出となった。地山、遺構底面ともに東から西へむかって傾斜して降っていく。SD1、SD2といった溝を検出したが、溝の外側では、近代以前の遺構はほとんど検出できなかった。溝の掘削にあたっては、土層堆積状況確認用の畦をもうけておこなった。SK2とよぶ溝は、西へむかい深くなっていったが、調査終了後におこなわれる予定

の、住宅建築の際の基礎工事および地盤改良とのかねあいで、調査区中ほどより西側については、標高11.6m以下は掘削しなかった。

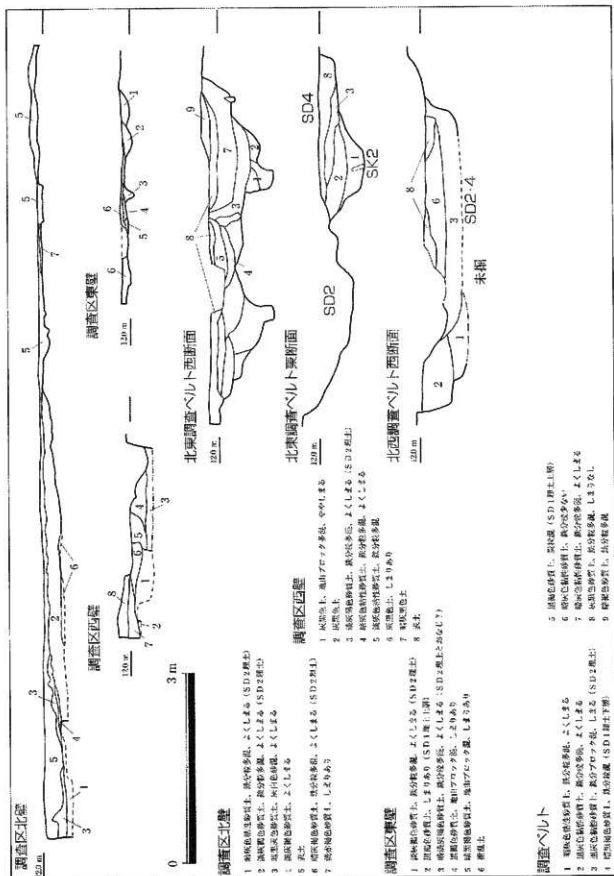


図4 調査区および遺構断面図

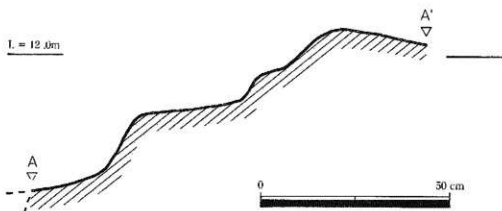


図5 S D 2 階段状遺構エレベーション

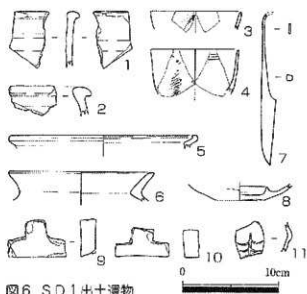


図6 S D 1 出土遺物



写3 近世以降の遺物 (1)



写4 近世以降の遺物 (2)

三、遺構と遺物

1 溝

S D 1 (図3・図6) 現状で幅60cm程度、深さ35cm程度の、浅い溝状遺構である。断面形は緩いU字形をなしている。方向をやや北へふりながら東西にはしている。淡黒褐色砂質土を埋土とし、陶磁器類を中心に近世～近代の遺物が出土している。S D 1と重複して北側に平行する溝(S D 1')を検出したが、埋土や出土遺物に差はみられず、掘りなおし前のS D 1の姿であると推定した。

(図6-1)はすり鉢で、瀬戸11期。(7)は和鉄である。(8)は灯明皿で、19世紀半ばごろのものとおもわれる。(9・10)は性格不明の凸字形瓦質品である。五徳の類の部材であろうか。(11)は、盥い子形のノベルティである。全体に、江戸時代後半以降、すなわち19世紀半ば以後の遺物相とおもわれ、遺構もこの時期と考えられる。

S D 2 (図2・図4・図5・図7・図8) S D 1を完掘した下層より検出した。S D 1と同様、やはり東西上軸ながらやや北へふっている。調査区東側から西側へむけて幅を広げ、また深くなる。調査区西半では、溝底まで完掘できなかった。調査区東半では溝底の断面形はU字状を呈している。S K 2、S D 4の南肩をきるかたちで掘削されている。調査区東半での状況では、溝底に多数のピットが密集していた。溝西部では

階段状に溝へ降りる遺構を検出しており、溝にかかわる施設の可能性がある(図2-AA・図5)。

溝埋土や溝底およびそのピットからは、陶磁器のほか、火打ち石やその原石とおもわれる河原石が多量に出土した(写7がその一部)。SD1とのまじりも予想される埋土上位の遺物が、図7である。(1)は天目茶碗で、大窯3期ごろ。(2)はすり鉢の口縁で、古瀬戸後期4段階新相。(3)は土師器台付甕の底部付近であろう。(4・5)は火打ち石である。(4)については、石器剥片の可能性もある。(6)は中世常滑焼、(7)は大窯。また、SD2にともなう確実性が高いと考えられる埋土中～下層出土遺物が、図8・写8～写13である。(図8-1～13)は埋土中層、(図8-14～29)は埋土下層の遺物である。(1・22)は甕、古瀬戸後期4段階。(7・8)は火打ち石である。(10)は筒形香炉、古瀬戸後期3～4段階。(12)は仏前具、古瀬戸後期4段階古相。(20)は常滑焼、中野編年11期。(23)は口広有耳壺の底部、古瀬戸後期4段階。(25)は、高台付近のみの破片だが、鉄分が溶着し、器壁もつよく被熱した形跡がある。埋壊ないし取瓶の可能性が高い。関連遺物としては、SD2およびその底のピットから鉄滓数点、鉄分の溶着した輪羽口片が出土している(写8・写9)。(26)は中国青磁の底部である。15世紀後半ごろとおもわれる。(26)は平碗、古瀬戸後期4段階。(28・29)は古墳時代の土師器である。(28)は台付甕の脚部、(29)は高坏脚部である。以上の遺物相から、この溝は戦国期、なかでも15世紀後半～16世紀半ばごろの遺構と考えられる。

SD3 調査区南壁際で検出した、南北方向の小溝である。検出状況ではSD1とつながっており、や、埋土中より19世紀半ば以降の陶磁器類が出土したことから、SD1にともなう遺構と考えられる。

SD4 (図11-4～8) SD2にほぼ平行する溝で、調査区北壁際で検出した。調査区中ほどでSD2と合流する。層位から確認したきりあい関係では、SD4はSD2以前に掘削されているようである。ただし、両者の遺物相に差はなく、ほぼ同時期のなかでの先後関係とおもわれる。(4)は瓶子Ⅲ類の脚のつけ根付近、古瀬戸後期3段階～4段階。(5)はすり鉢、古瀬戸後期4段階。

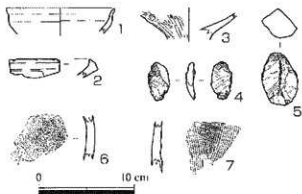


図7 SD2上層出土遺物



写5 図7-6



写6 図7-1



写7 火打ち石(SD2)

2 土坑

SK1 (図9) 調査区南西部をおおきく占める大型の土坑である。実際には、時期を前後する複数の土坑がきりあって存在するようだが、調査条件から完掘せず、一括した。おおきな擾乱坑があげられていた場所をトレンチとして上層堆積状況のみ確認するにとどめた。(図9-1～3)は近代の陶磁器。(4)は中国同安窯系青磁の口縁

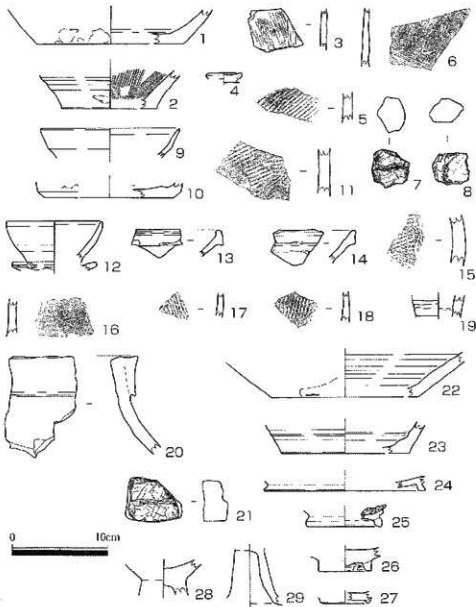
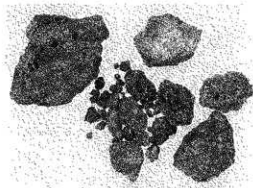


図8 SD2中～下層出土遺物



写8 鉄滓・割羽口 (SD2)



写9 土坑 (SD2)

物は、(9)が山茶碗の大型の壺または甕、(10)は古瀬戸後期4段階のすり鉢、(11)が尾張系5期の山茶碗。SD2・SD4にともなう遺構と考えてさしつかえない。

部片。いづれにせよ、近代以降に掘削された遺構であろう。

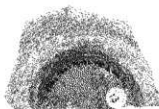
SK2 (図11-1~3) SD2およびSD4とときりあって掘られている土坑である。性格はよくわからない。これも調査条件から完掘できず、ちいさなサブトレンチをいれ、土層堆積状況と底面の状況を確認するにとどめた。ここでも底面にピットが確認できた。(図11-1・2)は古墳時代の土師器。台付甕の脚部と高坏の脚部である。(3)は山広有耳壺の底部、古瀬戸後期4段階。土層堆積状況からは、SD4にともなうか、それにやや先行する遺構とおもわれる。

3 ピット

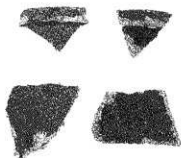
P1~P45まで確認したが、そのほぼすべてがSD2ないしSD4の底面で検出したものである。ピットには、底面に河原石が据えられているもののほか、鉄滓(写8)を出したのもあった。P35(図11-9~11)の出土遺



写10 仏銅具 (SD2)



写11 中国青磁 (SD2)



写12 すり鉢



写13 常滑焼口縁

まとめ

今次調査では、中世の溝 (SD2・SD4) がおもな遺構であった。その時期は、第2次調査で検出した遺構・遺物とちかい時期のものである。これら中世の溝がいったいどのような性格のものであったかははっきりしないが、次のような点に注目することができる。

① 中世溝の時期がおおよそ15世紀後半から16世紀に位置づけられる。

② 火打石の量が遺構の内容に比して異常におおい。

③ 鉄滓や埴埴、鑢羽目といった製鉄関連遺物が、おおくが小破片とはいえ、そろっている。

④ ごく少数ながら中国青磁が存在する。

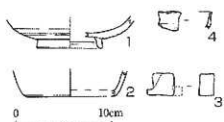


図9 SK1 出土遺物

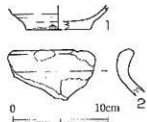


図10 SK6・SK12 出土遺物

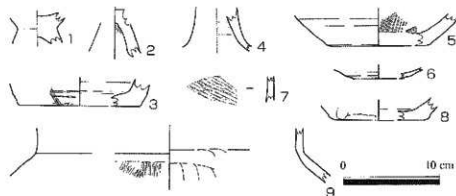


図11 SK2・SD4・P35 出土遺物

⑤ 溝に降りる階段状の遺構が存在する。

また、すでに台地斜面が削平されていたとおもわれることや、溝の底～肩の形状を考えれば、本来はこれら中世溝がもっと深く、上面が高いところにあったと考えられなくもない。そのばあい、溝底面のピットは逆茂木や杭の類の痕跡であろうか。さらに、製鉄を示唆する遺物の存在や、輸入磁器の存在、火打石のおおきなどを考慮するなら、中世城館関連の溝と考えてもよいかもかもしれない。近隣には、桜中村城跡をはじめ中世城館遺跡も比較のおおき、ありえることだろう。

遺跡の主要な部分が台地上にあるのたいして、今次調査地点は、台地斜面から谷にかけてであり、かつ遺跡の範囲外との境に位置している。にもかかわらず一定の遺構と遺物が確認できたことは、遺跡の展開する範囲を示唆するだけでなく、中世における当地域の利用が盛んであったことをも示していよう。今後の調査の進展をまちたい。

【参考文献】

三渡俊一郎ほか1969『南区の原始・古代遺跡』

名古屋市教育委員会1979『瑞穂遺跡・桜台高校遺跡発掘調査概要報告書』

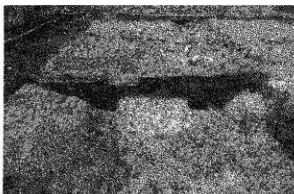
名古屋市教育委員会1996『埋蔵文化財調査報告書25』



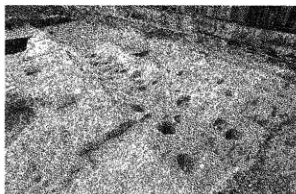
写 14 調査区全景（西より）



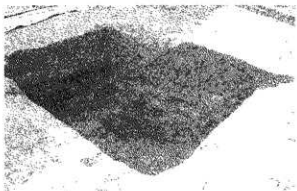
写 15 SD1（西より）



写 16 SD2埋土断面



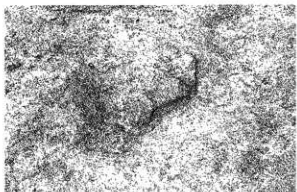
写 17 SD2（南東より）



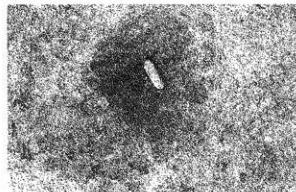
写18 SK1トレンチ



写19 SD2東端周辺のピット



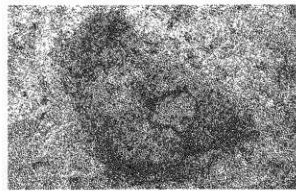
写20 P35遺物出土状況



写21 P4 (北より)



写22 P15 (西より)



写23 P29・P30 (南より)



写24 P31 (南西より)



写25 P39・P40・P41 (西より)

春日野町遺跡 (第3次)



例 言

1. 本編は、春日野町遺跡第3次発掘調査の報告である。
2. 調査地点は名古屋市南区春日野町26である。
3. 調査は個人住宅の建設工事に伴うもので約70㎡を対象とした。
4. 調査期間は、平成12年(2000年)8月28日～9月18日であった。
5. 調査は名古屋市教育委員会が実施し、調査に関する調整事務は文化財保護室が、発掘調査は名古屋見晴台考古資料館が担当した。調査担当学芸員は、伊藤厚史・伊藤正人・藤井麻隆である。
6. 資料整理・報告書の作成作業参加者を以下に記す。
稲田望子、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木佳子、山本雅代
8. 本編は、貝層ブロックサンプリングの結果については稲田が、それ以外を伊藤正人が執筆した。

目 次

I 遺跡の概要	45
II 調査の経過	46
III 土層と遺構	47
IV 貝層ブロック・サンプリングの結果	52
1. はじめに	52
2. 水洗選別の結果	52
3. おわりに	52
V 遺物	53
VI まとめ	58

I 遺跡の概要

春日野町遺跡は、熟田層と呼ぶ更新世台地上に立地する。山崎川と天白川に挟まれた南区内の島状の台地は、笠寺台地と呼ぶ。台地を流下する小谷の開析により、台地線の形状は複雑に入り組んでいる。春日野町遺跡も、こうした小谷に南と西を囲まれた、標高15m前後の台地面に立地する。

春日野町遺跡では、1994年に遺跡北東部で第1次調査が、1999年に今回の調査地点の北東約30mで第2次調査(写真2右上の2軒の住宅の地点)が行われた。第2次調査では、弥生～古墳時代の住居跡3軒や、戦国時代の城館の堀と考えられる大溝1条などが発見されている。

春日野町遺跡を含む一帯の台地面には、弥生時代中期後半以降、連続とした生活痕跡が確認されている。現在の遺跡分布は、図2のように捉えられているが、これらは一連の遺跡群として、相互に関連し、あるいは機能を分担して形成されたと推定できる。例えば、弥生時代後期においては、見晴台遺跡と桜田貝塚・貝塚町遺跡および春日野町遺跡に集落の主体があり、古墳時代の初めまで継続する。古墳時代には、拠点は北方の桜本町遺跡付近へと移り、桜台高校遺跡とともに平安時代前期まで継続する。平安時代の創建を伝える笠覆寺(笠寺観音)との直接的な関連は不明だが、その盛衰は、これらの遺跡群にも影響したであろう。中世には、桜中村城や第2次調査で推定された城館の存在から、これらを支えた地域圏の核となっていたものと思われる。近世は、村絵図によって、主に耕地となっていたことがわかる。



図1 遺跡の位置 (1:50,000)

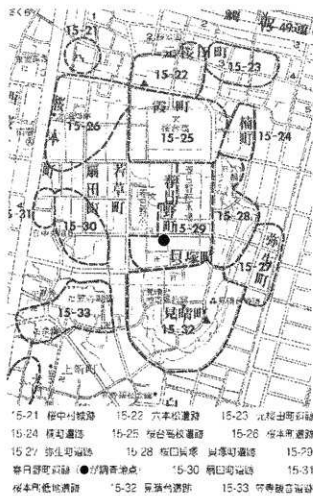


図2 周辺の遺跡 (1:10,000)

II 調査の経過

現地調査期間は、2000年8月28日～9月18日であった。現地には、着手の直前まで旧家屋が立っており、8月26日に土地所有者による撤去作業が終了した。現地での作業経過を以下に記す。

- 8月28日(月) 着工。資材・重機の搬入、安全フェンスの設置。調査区設定・測量基準点設置。基準点は、1999年におこなった2次調査時に、道路上に設置した測量鉄から引照した。
- 29日(火) 表土除去。地山の浅い西半では、検出にも着手。
- 30日(水) 表土除去完了。遺構検出を進めるとともに、SD1を掘削。
- 31日(木) 雨天、作業休止。
- 9月1日(金) 包含層掘削・遺構検出掘削。黒色土上上の遺構を掘削。
- 4日(月) 包含層掘削・遺構検出掘削・仕上掘削。SD1完掘写真を撮影。
- 5日(火) 住居状の遺構(後にSB1・2とする)を掘削。
- 6日(水) SB1・2を掘削。SB1内の遺物は、出土位置・レベルを略測図化。
- 7日(木) SB1・2他、遺構を掘削。SB2西寄りに重複する掘立柱建物の存在を認識。
- 8日(金) 遺構掘削、主にピットを掘る。十層断面図作成・写真撮影も進める。
- 11日(月) 雨天、作業休止。夜にかけて記録的豪雨。市内および県内各地で水害。
- 12日(火) 雨天、作業休止。
- 13日(水) 排水・復旧の後、遺構仕上掘削。
- 14日(木) 遺構仕上掘削、清掃。全景写真撮影。土層断面図作成を終了。平面図作成。
- 18日(月) 平面図作成終了。埋戻しをおこない、調査を完了。

なお、調査区南東部で検出したSD2は、大型で深いと推定された。部分的に調査区内にかかるのみであるが、完掘すれば建設予定の住宅基礎に影響が及ぶため、理上の掘り下げは、住宅工事の予定深にとどめた。したがってSD2の深部は、残存している。



写真1 着手前近景 (北西から)



写真2 作業風景 (南西から)

Ⅲ 土層と遺構

調査地点付近の微地形は、現状では四方に下がり、かすかな高まりを示している。こうした微地形が、旧来の地形をどの程度反映しているかは不明である。今回の調査区の中でも西寄りがやや高いが、遺構は希薄である。地山が削られている可能性はあるが、遺構が完全に失われたとは考えられず、もともとこの部分には遺構が存在しなかったものと思われる。

基本土層は、上から1.表土(攪乱土)、2.中世～近世の灰褐色の砂質シルト、3.弥生時代～古代あるいは中世前期の黒褐色シルト、4.地山の橙褐色シルト(熱田層)である。

以下、主な遺構について述べる。

SB2は、結果として2軒の竪穴住居が重複していた。外側(西側)のSB2Aは、弥生時代後期末の可能性がある。土器が出土したP34を柱穴とした場合であって、P64がこれに対応する。住居の角は確認できなかったため、規模は不明である。地山の赤変部分が2ヶ所見られたが、焼土とする確証はない。内側のSB2Bは、北壁際に角を認めるが、SD1以来は把握できなかったため、やはり規模は不明である。周溝の外寄りには、深さ10cm程度の小ピットが等間隔で並び、住居に伴うものと考えられた。須恵器を出土したP9が、柱穴となる可能性を考えたが、対応しそうな柱穴はP64であって、SB2Aとの択一となる。あるいはP53も考えられるが、P53にはSH1に伴う可能性もあり、やはり特定できない。2軒の住居には、SD1西側の大半が戦国期の遺構と重複していたこともあり、直接伴う遺物が不明確であった。

SIIIは、SB2の北西部に一部重複して検出した、6本の柱穴(P57・SK8・P52・P17・P51・P48)である。東西2間、南北1間を捉えたが、調査区北壁に近いので、北に広がる総柱建物であった可能性もある。いずれの穴も複雑な形状で、建て直しが推定された。埋土状況から、SB2を切り、古墳時代以降のものと考えられる。P57とP17の軸線上やや内側に位置するP20は、焼上坑である。単独で営まれた可能性と、SH1に関連した可能性が考えられる。

SB1は、土器・須恵器片等がやや集中した浅い竪穴状プランを呼んだ。少なくとも西側には周溝が見られたが、柱穴は検出できず、住居と確認はできなかった。主体となる出土遺物から、奈良時代頃の遺構であったと推定される。古墳時代の土器等がやや多く混在し、西壁付近で2点の白玉が出土したことから、古墳時代の遺構が重複していた可能性も考えられる。

SD2は、地山ブロックを主体とする人為的な埋め戻しを埋土とする大規模な遺構である。SB2埋土を切って、ほぼ垂直に立ち上がる西側のライン約5mを検出した。全形は、まったく不明であるが、出土遺物から戦国時代の遺構と考えられる。形状や埋土状況から、SD2は、城館の堀の一部であった可能性が高い。SK1も、ほぼ同時期に形成された可能性がある。不整楕円形の土坑で、地山には痕跡を残していない。埋土中の貝層については、後述する。SK1周辺やSB2の北西部には、他にも形状の不明確な中世前期～戦国時代の遺構が重複する可能性がある。

SD1は、SB2やSD2を切って調査区を縦断する溝を一括して呼ぶ。把握したのは新旧2条であるが、改修を繰り返した溝が、微妙に軸をずらして重複しているものと考えられる。砂質の強い灰色土の埋土中には遺物が少ないが、近世末以降に埋没している。農業用(?)の水路を兼ねた側溝として用いられたものであろう。

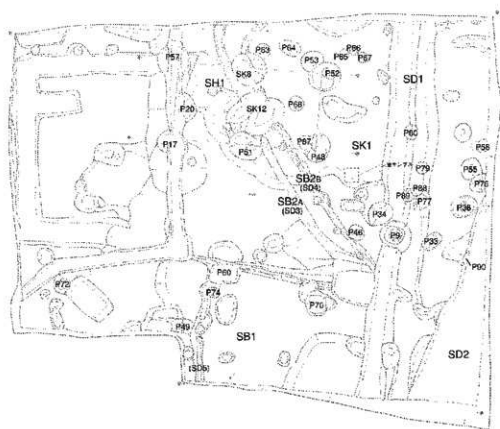
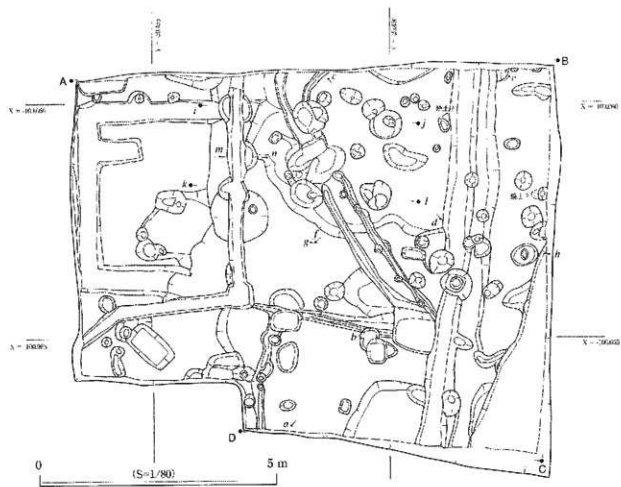


图3 荆善区全体图

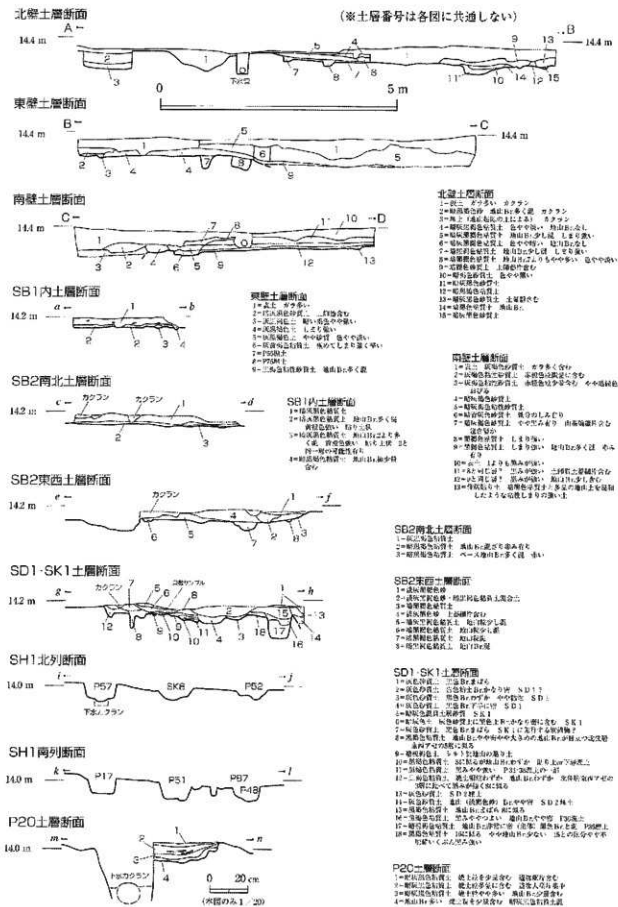


図4 土層断面図

遺構名	時期	埋土	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	出土遺物・メモ	遺物図
SB1	古代	土層図参照				13.95	土器、須恵器、硃石	1~18
SB2A	弥生or古墳	土層図参照				13.95	土器	
SB2B	古墳	土層図参照				13.9	遺物の大半は上層遺構に由来	(33~38)
SH1	古代or中世	各ビット参照	3.2	1.8			SK8-P17-48-51-52-57を参照	
SD1	近世~近代	灰褐色砂質土		1.0	0.2	13.7	土師鍋、山茶碗、陶器、磁器、焼酎	
SD2	中世?	灰色砂地山Br.				13.7	土師鍋、山茶碗、鉄種陶器、火打石	39~43
SD3 (SB2A)	弥生or古墳	暗黒褐色粘質土				0.1	土器	
SD4 (SB2B)	古墳	暗黒褐色粘質土				0.05	土器	
SD5 (SB1)	古代	黒褐色シルト				0.05	土器	
SK1	中世	青黒色土、貝層		1.0?	0.2	14.0	土器、内耳銅、陶器、硃石 (SB2に混)	44・図5
SK6	中世	暗灰黒色土		1.0	0.2	13.7	SK1の北西隅、形状不詳SB2上部	
SK7	中世	暗灰黒色土		1.0	0.2	13.7	前工円盤SK6の北隣、(以下同上)	45
SK8 (SH1)	古代or中世	灰黒褐色土	0.7	0.45	0.2	13.7	土器、須恵器、SD4を切る	
SK12	古代or中世	暗灰色土、地山Br混	1.0	0.5	0.15	13.8		
P9	古墳	暗黒褐色土	0.7	0.6	0.35	13.45	土器、須恵器や高木杯	23
P17 (SH1)	古代or中世	暗灰黒色粘質土、地山Br混	0.7	0.5	0.3	13.7	土器、須恵器	
P20	古墳	暗灰黒色土、地山Br混		0.6	0.15	13.85	焼土坑、土器、須恵器	24・25
P33		黒色土、地山Br混	0.45	0.3	0.45	13.4	土器	
P34	弥生	暗黒褐色土、地山Br混	0.55	0.5	0.6	13.25	貼床(地山Br)で蓋、貼床はSB2Bに伴う?、土器高杯・甕	19-26-27
P36	古墳?	暗黒褐色土、地山Br混	0.55	0.4	0.5	13.35	土器付付壳・ミニチュア土器、須恵器	21-22-28
P46		黒褐色粘質土	0.4	0.3	0.45	13.5	SD4を切る、土器	
P48 (SH1)	古代or中世	黒褐色粘質土、地山Br混	0.6	0.4	0.3	13.55	土器、下呂石模形石器、須恵器、土師鍋、山茶碗、(上部遺構由来?)	29-30
P49	古墳?	暗灰褐色(黒色)土	0.15	0.15	0.1	13.85	土器、白玉	31
P51 (SH1)	古代or中世	黒褐色粘質土	0.7	0.55	0.3	13.6	土器	
P52 (SH1)	古代or中世	暗灰褐色土	0.7	0.6	0.15	13.8	土器	
P53		暗灰黒色土?	0.5	0.4	0.65	13.25	P52と関連(雄賛)?、土器	
P55		黒色土?	0.45	0.4	0.45	13.45	土器	
P56		黒色土?		0.25	0.25	13.65	焼土(?)を切る	
P57 (SH1)	古代or中世	黒褐色粘質土、地山Br密	0.7	0.6	0.35	13.7	土器	
P60		黒色シルト					SH1の貼床の一部か?、白玉	32
P63		暗灰褐色土、地山Br、少し混	0.3	0.3	0.45	13.45	土器	
P64		同上	0.5	0.3	0.55	13.35	土器	
P65		同上	0.2	0.2	0.5	13.4	土器	
P66		同上	0.2	0.2	0.3	13.6	土器	
P67		同上	0.25	0.2	0.25	13.65	土器	
P68		同上	0.3	0.3	0.25	13.65		
P70		暗褐色土、Br混	0.5	0.45	0.25	13.65	土器甕	20
P72		黒色土	0.25	0.25	0.3	13.7		
P74		暗褐色土、Br密	0.25	0.2	0.25	13.7	SB1貼床下?、土器	
P76		暗灰褐色土		0.4	0.3	13.6	土器	
P77		暗褐色土	0.5	0.3	0.25	13.6	土器	
P79		暗灰褐色土	0.3	0.25	0.35	13.55		
P80		暗黒色土	0.3	0.3	0.45	13.35	土器	
P87		地山・黒色Br混成	0.35	0.25	13.6	13.6	P48に切られる	
P88		黒色土	0.2	0.5	13.3	13.3	P77に切られる?、土器	
P89		黒色土、地山Br混	0.25	0.3	13.55	13.55	P77・88に切られる、土器	
P90		黒色土 (未掘)					SD2に切られる	

表1 主要遺構一覧表

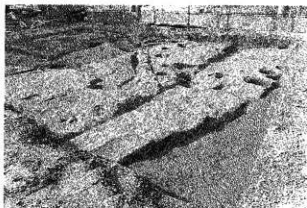


写真3 調査区全景 (南東から)



写真4 調査区全景 (北東から)

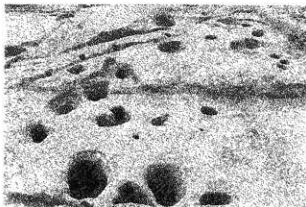


写真5 SB2周辺 (東から)

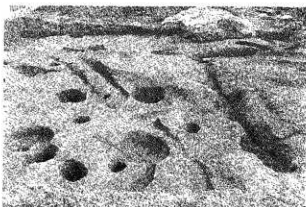


写真6 SH1 (北から)

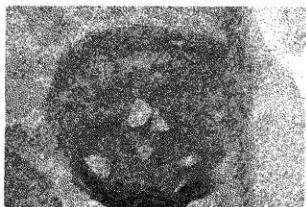


写真7 P34遺物出土状況 (東から)



写真8 P9遺物出土状況 (南東から)

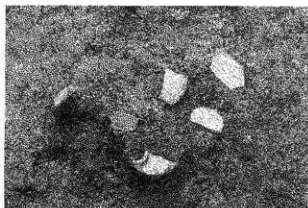


写真9 SB1遺物出土状況



写真10 SD1とSD2 (南西から)

IV 貝層ブロック・サンプリングの結果

1. はじめに

SK1において貝層が検出され、ブロック・サンプリングを行った。サンプリングは1ヶ所で(図3・4)、タテ30cm・ヨコ30cm・厚さ10cmで実施した。水洗選別は残存状態が非常に悪く困難であったが、自然遺物と人工遺物を検出した。自然遺物は貝類と動物遺体を主とし、人工遺物は土器片、炭化物片と砥石を検出した。詳しい報告は以下のとおりである。

2. 水洗選別の結果

2-a. 自然遺物

まず貝類について。10種と3科(種の特定の難しいもの)、さらに陸産微小貝を検出した。(表2)

腹足綱(巻貝類)が3.74%、斧足綱(二枚貝類)が96.27%と圧倒的に斧足綱が多い。斧足綱の中でもマガキが82.64%と多い。ただ、大きいものでも殻高40mm、殻長35mm程である。これは自然環境の変化を受け、大きくならなかったものなのか、養殖をしなかったためなのかはわからない。この他には、ヤマトシジミ8.35%、フネガイ科1.98%と続く。また、ウネナシトマヤガイ?と思われる斧足綱が検出されているが、これは食べたものというより、マガキ等を採取するとき一緒に採取されてしまったものであろう。腹足綱ではフトヘナタリ1.54%、ウミニナ、アカニシ、イボウミニナと続く。

動物遺体については、獣骨片と思われるが詳しい種類や骨の部位については筆者の勉強不足のため、特定できなかった。

2-b. 人工遺物

土器片(土師鍋片含む)、炭化物片を多数検出した。この他に非常に良く使い込まれた面を2面持つ砥石を検出した。(以上、表3)

3. おわりに

検出された腹足綱、斧足綱のいずれの貝も内湾水域に生息し、地理的位置も湾口部から河口で、底質が砂質・シルト～泥質・砂泥質に生息す

腹足綱 GASTROPODA	
アカニシ	<i>Rapana thosusiana</i> GROSSE
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i> LISCHKE
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> BRUGUIERE
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorarum</i> A.ADAMS
ウミニナ科	Patamidae SP.
斧足綱 PELECYPODA	
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> THUNBERG
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME
サルボウ	<i>Anadara(Scapharca) subcrenata</i> LISCHKE
ハイガイ	<i>Anadara(Tegillarca) granosa bisensensis</i> SCHENCK et REINHART
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> ROADING
ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium(Neotrapezium) japonicum</i> PILSBRY
シジミガイ科	Corbiculidae SP.
フネガイ科	Arcidae SP.

表2 貝類種名一覧

種名		左殻/右殻	最小個体数	%
腹足綱	アカニシ		2	0.44
	ウミニナ		6	1.32
	イボウミニナ		2	0.44
	フトヘナタリ		7	1.54
網	ウミニナ科片		+	
	小計		17	3.74
斧足綱	マガキ	334/376	376	82.64
	ヤマトシジミ	36/32	36	8.35
	左右不明のもの	3+2	2	
	シジミガイ科 左右不明のもの	7+2	4	0.88
	サルボウ	—/1	1	0.22
貝類	ハイガイ 左右不明のもの	1+2	1	0.22
	フネガイ科 左右不明のもの	18+2	9	1.98
	ハマグリ	1/1	1	0.22
	ウネナシトマヤガイ?	4/8	8	1.76
	小計		438	96.27
合計			455	100.01
獣	骨		32	
獣	骨		8	
不	明		1	
炭	化		64	
土	器		25	
砥	石		1	

表3 ブロック・サンプリング検出遺物構成表

るものである。よって、遺跡からあまり遠くないところに浜が広がり、貝などを採取し、食したりしていたと考えられる。

時代や位置は異なるが、名古屋市内の西志賀遺跡や三王山遺跡においても貝層ブロック・サンプリングを行っており、今回の貝の種名構成に大きな違いは見られない。構成比率はそれぞれ多少なりとも違いがあり、今後の発掘調査で貝層ブロック・サンプリングの資料が増えていけば、海岸線の変化を正しく追うことは難しくても、湾内の環境変化を追うことができたり、人々の生活の変化等の一端を検証する時、有効な資料となるであろう。

(稲田望子)

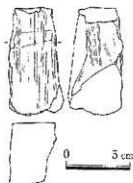


図5 貝層出土礫石

参考文献

- 服部哲也ほか 1996 『西志賀遺跡 発掘調査の概要』
水野裕之ほか 1999 『縄文文化財調査報告書30 三王山遺跡(第1～5次)』

V 遺物

出土遺物のうち主なものを図5～7に掲載し、表4にその観察内容を一覧した。遺物量は、人工遺物がコンテナケース約3箱と多くはないが、弥生時代後期から近世までの断続する時期の遺物が認められた。土器破片は、遺物全体のうちの相当量を占めるが、細片化・風化しており、弥生土器か土師器かの判断もできず、時期を特定できないものが大半である。

弥生時代では、後期末頃の土器がP34・P36・P70等で出土している(19～22・26・27・33)。下呂石の剥片が数点見られるが、これらが伴うのは、この時期以前であろう。下呂石剥片(17・18・30)は、いずれも原表面が残り、原石が円礫であったことがわかる。一次加工が近辺で行われた可能性が考えられる。

古墳時代では、ビッド出土遺物の他、SB1内から散乱状態で出土した遺物の中に土師器等が見られた。古墳時代の須恵器は、P9とP20で器形のわかる遺物が出土した。5世紀末～6世紀初め頃のもので、23は本来であればP9の埋土中位にあたる付近に埋葬されていた。SB1の土師器(1～3)もこれに近いやや先行する時期のものであろう。2点出土している白土(31・32)は、この頃のものであろう。

SB1から出土した遺物の主体は、須恵器(4～14)であるがやや時期幅があり、5世紀～8世紀のものが見られ、上記のように古い遺物も混在する状況であった。SB1からは、2点の礫石(15・16)も出土している他、鉄滓(写真18)も出土している。長径約7cm、重量約80gの碗形滓で、他には鉄滓は認められなかった。礫石との関連を思わせるが、今回の調査地点と直接関わるという根拠は得られなかった。

平安時代の灰釉陶器と、それに続く山茶碗は、細片がわずかに認められたのみである。山茶碗は、SD2で窯道具に転用された例(42)が1点出土しているが、持ち込まれた状況・理由はわからない。

SB2として取り上げられた遺物の多くは、15～16世紀のもの(34～36)であり、SK1あるいは他の掘り込みに伴ったものと考えられる。SK1からは、土鍋(44)や礫石(図5)等が出土している。SD2からも15～16世紀の遺物がわずかに出土(39～41)、SK1と同様戦国時代の遺構とする根拠を示している。火打石も、戦国時代に通常見られる在地産の石材をもちいている。

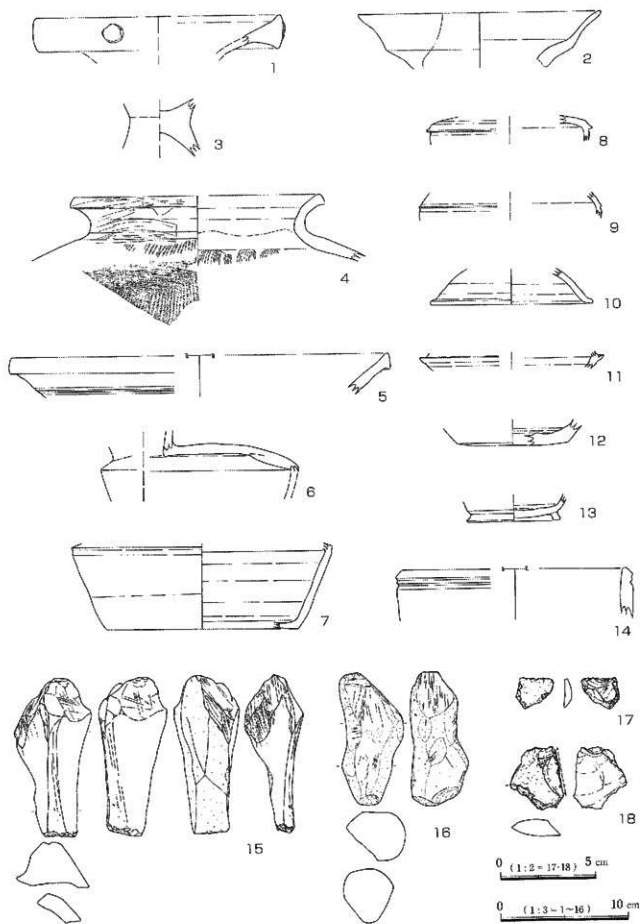
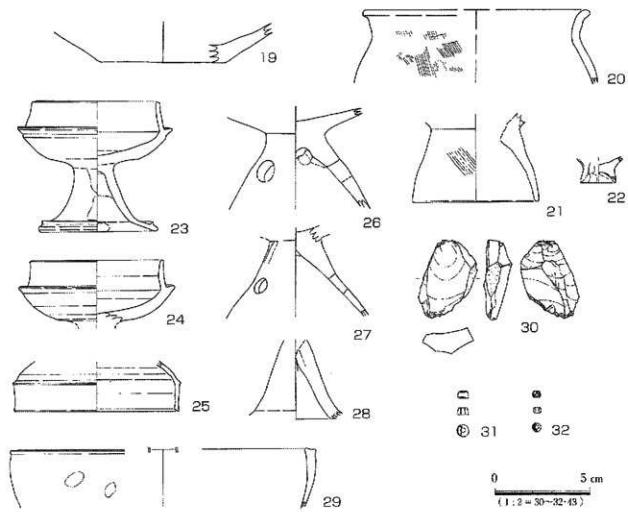
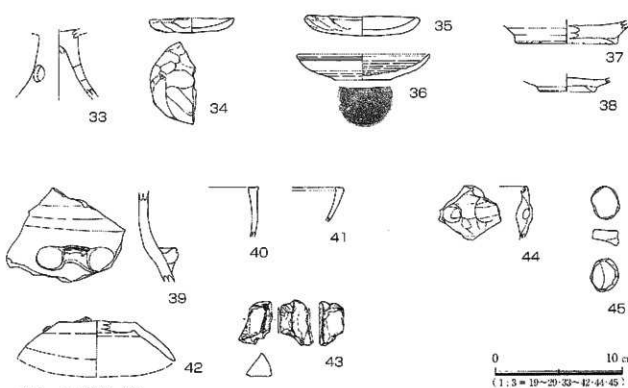


图6 出土遗物(1)



0 5 cm
(1:2 = 30~32-43)



0 10 cm
(1:3 = 19~20-33~42-44-45)

図7 出土遺物 (2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	保存率(%)	観察内容	写真
1	土器 広口壺	S B1			にぶい黄褐色、やや密、口縁に貼付文1つ確認	13
2	土器 碗	S B1	口径(19.0)	10	にぶい黄褐色、やや粗、外面に黒斑あり	13
3	土器 台付甕	S B1			にぶい黄褐色、粗い	
4	須恵器 甕?	S B1	口径(19.5)	20	灰色、甕だが砂粒極わずかに含、外・内面の口縁から頸部にかけて化粧か? For 轆かかろ?	
5	須恵器 甕	S B1			灰色、甕だが砂粒わずかに含む	13
6	須恵器 平取	S B1			灰色、甕だが砂粒極わずかに含、外面部分的に釉(灰釉or自然釉)かかる	
7	須恵器 瓶	S B1	底径(15.0)	15	灰色、密、外面回転ヘラ削り、内面回転ナデ、外面わずかに自然釉かかる	
8	須恵器 杯蓋	S B1			灰色、密、右回りろくろ	
9	須恵器 杯蓋	S B1			灰色、密、綾あまり張り出さない	
10	須恵器 壺	S B1	口径(12.5)	10	灰色、密	
11	須恵器 杯身	S B1			灰色、やや密、口縁部内側へ立ち上がる	
12	須恵器 甕?	S B1	底径(8.5)	15	灰色、密、底部回転ヘラ切り	
13	須恵器 杯身	S B1	高台径7.0	100	灰色、緻密	13
14	須恵器 鉢or甕	S B1			灰色、やや密、外面にタタキ濁差?	
15	磁石	S B1	重さ約215g		オリーブ灰色、泥岩カ、広く平滑な面	16
16	磁石	S B1	重さ約260g		淡青灰色、やや目の粗い砂岩	16
17	剥片	S B1	重さ1.5g		下呂石、原礫表皮残る	17
18	剥片	S B1	重さ8.2g		下呂石、原礫表皮残る、二次加工	17
19	土器 甕	P 34	底径(9.5)	20	外面浅黄褐色、内面灰色、粗い、砂粒多く含む	
20	土器 甕	P 70	底径(9.5)		淡黄色、粗い、砂粒多く含む	
21	土器 台付甕	P 36	脚底径(10.0)	15	黄褐色、粗い、接合面内で剥離欠損	
22	土器 台付甕	P 36	脚頸部2.5	100	浅黄褐色、やや密、ミニチュア土器	
23	須恵器 有蓋高杯	P 9	口径(9.5)	30	灰色、密、外面と脚柱部内面部分的に釉(?), 杯部の見込は不定方向の指ナデ・指オサエ	12
24	須恵器 有蓋高杯	P 20	口径(10.5)	20	灰色、やや密、右回転ろくろ、外面回転削り	
25	須恵器 杯蓋	P 20	口径(13.0)	10	灰色、密、右回転ろくろ	
26	土器 高杯	P 34	頸部径5.0	100	明赤褐色、やや粗、砂粒多く含、透孔3箇所以上、脚頸部内面は指で半回転えぐるような痕	11
27	土器 高杯	P 34	頸部径4.0	100	明赤褐色、粗い、透孔3つ確認できる	11
28	土器 高杯	P 36			浅黄褐色～淡褐色、やや粗、内面しぼり痕有り	
29	土師器 土鍋	P 48			外面にぶい褐色、内面灰黄褐色、密	
30	模形石器	P 48	重量13.6g		下呂石、原礫表皮残る	17
31	白玉	P 49		50	滑石、オリーブ灰～オリーブ黒色	17
32	白玉	P 60		50	滑石、明緑灰～暗緑灰色、表面に剥痕?粉多数	17
33	土器 高杯	S B2			淡黄色、密、透孔3つ確認できる	
34	土師器 小皿	S B2	口径(6.5)	45	褐色、密、手づくね、外面は指ナデ・指オサエ痕がはっきりしている、内面はなめらかなナデ	14
35	土師器 小皿	S B2	口径(8.5)	15	浅黄褐色、密、手づくね、磨耗し調整不詳	14
36	無釉陶器 灯明皿	S B2	口径(10.0)	30	重圓皿、灰～灰褐色、密、口縁歪む	14
37	山茶碗 碗	S B2	高台径(8.0)	35	灰色、緻密、高台初痕、内面自然釉	
38	山茶碗 小碗	S B2	高台径(4.5)	45	灰白～灰黄色、やや密、見込指オサエ	
39	陶器 粗母襷茶壺	S D2			淡黄色、密、外・内面全体に鉄釉、顔き不明	15
40	土師器 土鍋	S D2			外面浅黄褐色、内面褐色灰色、砂粒わずかに含む	15
41	土師器 土鍋	S D2			にぶい黄褐色、密、外面スス付着する	15
42	山茶碗 煎道具	S D2	口径(12.5)	30	灰白色、やや密、蒸用蓋、煎盤片等種差、赤み	15
43	火打石	S D2	重さ4.4g		灰黄～明黄褐色、チャート	17
44	土師器 内耳鍋	S K1			灰黄～暗灰黄色、密、外面スス付着	14
45	加工川盤	S K7			淡灰白色、山茶碗高台を使用、磨耗著しい	
図5	磁石	S K1	重さ約260g	15	赤黒～にぶい褐色、硬質の砂岩カ、非常に平滑	16

表4 遺物観察表

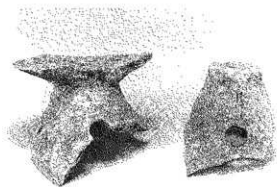


写真11 P34出土土器



写真12 P9出土須恵器

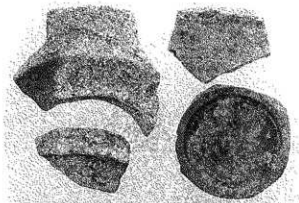


写真13 SB1出土土器・須恵器

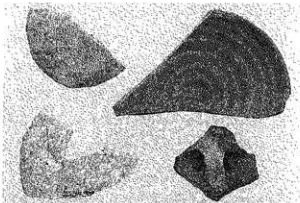


写真14 SK1出土遺物

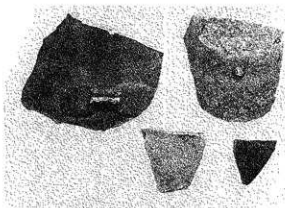


写真15 SD2出土遺物

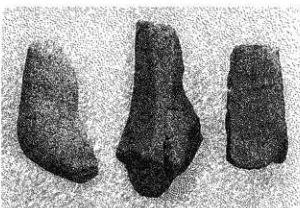


写真16 磁石

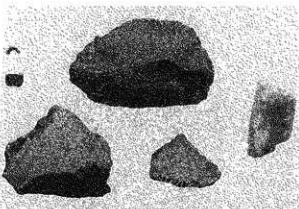


写真17 白玉・剥片・火打石

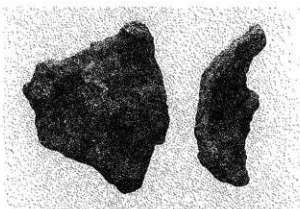


写真18 鉄滓（右半片は割れ口を見る）

VI まとめ

今回の調査で、明確な遺構を捉えたのは、弥生時代後期末・古墳時代後期・奈良時代とその前後・中世後期・近世後期と、かなり多岐な時代にわたる。しかし、いずれの時期も、遺構が濃密とは言えない。台地縁からわずかに入った小谷に面するという地形的な条件が、この地点の遺構の性格を、ある程度規定していたものと思われる。以下、2次調査地点と合わせた図8をもとに、時代順に概要をまとめる。

弥生時代後期～古墳時代前期には、見晴台遺跡や桜田貝塚が構成した集落群の一部であったと考えられる。この時期の住居は、現在の方位と斜めに交わる軸で共通している。密集するという印象はないが、SB2のように軸方向を一致させて重複したり、2次西区でも住居跡の切り合いが認められるなど、広範囲で継続あるいは断続した居住地だったようである。

古墳時代後期～平安時代初め頃には、軸方向が現在の方位とほぼ一致する。SB1とSIIは、両者の関係は不明ながら、ほぼ東西あるいは南北の軸線を持つ。この時期の遺跡群の中心は、春日野町遺跡より北方に推定されており、前代以上に遺構は限定されるようである。

平安時代～中世は、さらに遺物も断片的となり、構築物を設ける土地利用は、ほとんどなされなかった。遺物量が若干増えるのは、この付近に城館あるいはその前身が営まれた期間で、15～16世紀のみである。城館が規定した土地の区画線は、近世に継続し、明治時代の地籍図に名残を留めていると考えられる。

小谷をはさんで南接する見晴台遺跡の40次にわたって蓄積した調査成果との対比分析など、なお行うべき作業は多いが、ひとまず第3次調査のまとめを終える。

主な参考文献

三波俊一郎 1969 『南区の原始・古代遺跡』 名古屋市教育委員会

水野裕之 2000 『春日野町遺跡（第2次）』 『埋蔵文化財調査報告書34』 名古屋市教育委員会



図8 第2次調査との位置関係

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ		
書名	埋蔵文化財調査報告書		
副書名	西志賀遺跡(第2次) 松ヶ洞14号墳 桜台高校遺跡(第3次) 春日野町遺跡(第3次)		
巻次	39		
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告		
シリーズ番号	52		
編著者名	伊藤正人・服部哲也・藤井康隆		
編集機関	名古屋市長見贈考古資料館		
所在地	〒457-0026 名古屋市中区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223		
発行機関	名古屋市教育委員会		
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268 FAX 052-972-4178		
発行年月日	西暦2001(平成13)年3月30日		

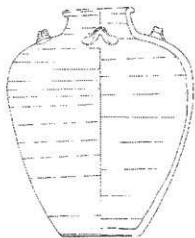
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にししがいせき 西志賀遺跡	にししかいぢちやう 西区貝田町1-34-1	23100	3-15	35° 11' 48"	136° 54' 8"	2000. 2.18~3.3	30m ²	個人住宅 建設
まつがほら14ごうぶん 松ヶ洞14号墳	もりやまくおほなぎきっこ あぎまつがほら 守山区大字古根 字松洞3254・261		1-117	35° 13' 11"	136° 59' 29"	2000. 9.14~ 10.20	150m ²	
さくらだいこうこう いせき 桜台高校遺跡	みなみくわかきちやう 南区若草町85番2・ 3・4・6		15-25	35° 6' 1"	136° 56' 28"	2000. 11.1~12.1	80m ²	
かすがのちやういせき 春日野町遺跡	みなみくかすがのちやう 南区春日野町26		15-29	35° 5' 52"	136° 56' 32"	2000. 8.28~9.18	70m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西志賀遺跡	集落跡	弥生時代	溝・貝塚	弥生土器・須恵器	第2次調査
松ヶ洞14号墳	古墳	古墳時代	方墳	須恵器	
桜台高校遺跡	集落跡	中世、近世	溝、土坑	陶磁器、火打石、鉄滓	第3次調査
春日野町遺跡	散布地	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	住居跡 住居跡 住居跡(?) 上坑・貝層 溝	土器・下呂石剥片 土師器・須恵器・白玉 須恵器・砥石・鉄滓 土器・陶器・砥石・火打石 陶器	第3次調査

埋蔵文化財調査報告書 39

2001 (平成13) 年 3月 30日

編集 名古屋市見晴台考古資料館
発行 名古屋市教育局
印刷 株式会社 名古屋大気堂



参考：祖母棟茶壺（室町後期）S=1/6
鉄輪、底部外面に水で「祖母棟」銘
【瀬戸市史民俗資料館研究紀要Ⅱ】(1985)より
（春日野町遺跡 p.55-56 を参照）



